

のべおか新興の母  
したがう  
**野口 遵**



野口遵顕彰会



記念塔

カザレ記念広場

カザレ記念広場 (旭化成薬品工場)

# 目 次

はじめに	1
1. 野口 <sup>したがう</sup> 遵のおいたち	3
少年時代（人並みはずれたいたずらっ子）	
学生時代（校内一の「暴れん坊」）	
2. 社会人としての第一歩	6
わが道を行く	
3. 事業家としての基礎 <sup>きそ</sup> をみがく	8
シーメンス会社へ入社	
4. 事業家としての第一歩	9
曾木電気株式会社を創立	
日本カーバイド商会を設立	
石灰窒素 <sup>ちっそ</sup> 製造の特許権を取得	
5. 事業家としての躍進 <sup>やくしん</sup>	13
鏡工場を建設	
カザレー式アンモニア合成法の特許権を取得	
6. 延岡工場建設・市発展の基礎 <sup>しきち</sup> を築く	16
新工場の敷地さがし	
延岡の恵まれた自然条件	
五ヶ瀬川電力株式会社の設立	
工場の誘致 <sup>ゆうち</sup> と地元有志 <sup>ゆうし</sup> の尽力 <sup>じんりょく</sup>	
工場完成から稼働 <sup>かどう</sup> までの苦難	
工場の拡張・発展	
7. 延岡から朝鮮半島へ	29
赴戦江開発（川の流れを逆流させることができるなら）	
興南工場建設（世界第2の化学工業都市建設をめざして）	
長津江開発（土木界での世界記録）	
鴨緑江開発・水豊ダム（世界の奇跡）	
8. 事業への夢広がる	40
9. 全財産 <sup>きふ</sup> を寄付	40
10. 巨星 <sup>お</sup> ついに墜つ	42
おわりに	43

# はじめに

皆さんは、野口 <sup>したがう</sup> 遵という人の名前を聞いたことがありますか。「野口」…そう言えば、延岡市役所の西側にそんな名前のホールがあるが…あれはたしか「野口記念館」という建物だが、何か関係があるのかな？ そうです。大いに関係があるのです。

野口記念館は、昭和28年（1953年）に、当時の旭化成工業株式会社が創業30周年を記念して延岡市に寄贈したもので、旭化成株式会社の基礎を築いた野口 遵の姓をとって命名されたホールです。延岡市民はもとより、県北の人々の文化活動に大いに貢献してきた建物です。

野口 遵は、大正12年（1923年）当時まだ鉄道も通っていなかった九州の片田舎の延岡の地に、20世紀をリードする化学工場の建設を開始して、現在の工業都市「延岡」の基礎を築いた人です。

延岡市の初代市長である仲田又次郎氏は、「野口 遵翁は、延岡新興の母である」と、その偉大な業績を <sup>たた</sup> 称えておられますが、私たちにとって決して忘れることのできない人物です。

ところで、科学者であり事業家である野口 遵は、<sup>きばつ</sup> 奇抜な発想とたくましい行動力で人々の夢や願いを次々に実現させ、当時の人々を驚かせたものです。



野口記念館

例えば、農業に肥料は欠かせません。作物を多く収穫<sup>しゅうかく</sup>するには肥料が必要です。「無尽蔵<sup>むじんぞう</sup>にある空気から肥料が取れないだろうか」これを実現させたのです。

川の水は上流から下流へと流れる。これは小学生でも知っている常識です。「川の水を逆流させることができないか。そうすれば電気を起こすことができる」だれもが夢にも思わなかった事をやってのけたのです。

戸数およそ、20～30戸くらいの小さな<sup>さび</sup>淋しい一漁村がわずか十数年後には人口18万を擁する一大化学工業都市に<sup>へんぼう</sup>変貌しました。北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の興南（フンナム）です。後に、このことは世界中の人々から「奇跡<sup>きせき</sup>」と言われましたが決して魔法<sup>まほう</sup>を使ったわけではありません。

延岡市発展のためにはかり知れない功績のあった野口<sup>したがう</sup> 遵が科学者として、また世界的な事業家としてどのような業績を残したか、また、延岡市の発展にどうかかわってきたか、これから皆さんと一緒に調べてみましょう。

21世紀の日本を背負って立つ中学生の皆さんが、野口 遵の精神を受け継いでたくましく成長することを願ってこの小冊子を届けます。



延岡市街地を望む

# 1. 野口 遵のおいたち

## 少年時代

### (人並みはずれたいたずらっ子)

野口 <sup>したがう</sup> 遵は、明治6年(1873年)7月26日、現在の石川県金沢市に、父之布<sup>ゆきのぶ</sup>、母幸子の長男として生まれました。後に、弟の駿尾<sup>としお</sup>、余波<sup>なごり</sup>、妹の操<sup>みさお</sup>の3人が誕生しました。

遵が生まれた明治6年といえば、江戸幕府を倒した明治新政府が廃藩置県を行った2年後のことで、岩倉具視<sup>ともみ</sup>大使一行が、欧米視察<sup>おうべい</sup>から帰国した年にあたり、世をあげて文明開化の風潮に向かおうとする時代でした。

父の之布は、加賀藩前田侯に仕え、勤王の志士として活躍<sup>かつやく</sup>した人でした。幕末の加賀藩では、藩内が勤王・佐幕の2派に分かれ、事あるごとに対立が見られましたが、勤王派の中心人物であった父は、佐幕派の画策<sup>ろうごく</sup>により、3年間牢獄生活をしいられました。その間、おのれの節操を曲げずに、苦しみに耐え、これから訪れる新しい時代を心に描いて<sup>えが</sup>じっと待ち続けた人物でした。

明治維新により、父の活躍する時代がやってきました。父は、新政府の役人に迎<sup>むか</sup>えられ、司法省に勤務するため、金沢から東京に移り住むことになりました。その時、遵は生まれてまだ20日しかたたない乳飲み子<sup>ちの</sup>でした。東京では、前加賀藩主前田侯の藩邸のある赤門(現・東京大学)の隣<sup>となり</sup>にある長屋で生活することになりました。母の幸子は、加賀藩の伊東氏の娘として



父 野口 之布



母 野口 幸子

生まれましたが、勝ち気な性格で、子どもたちを厳しさのなかにもおおらかな育て方をしました。

遵<sup>したがう</sup>は、野口家の長男として、父母から大切に育てられました。特に母は厳しくしつけを行い、例えば、「遵の帰宅が遅くなると、母は寝ずに待ち、帰ってくるとすぐには戸を開けず、なぜ遅くなったか問いただされ、ようやく家に入れてもらった後もしばらく注意を受けてから寝る…」などの話が残っています。また、父も遵のいたずらがひどい時には、刀をもって追っかけ回すということもありました。

そのような両親のもと、遵少年は負けん気の強い、人並みはずれた「いたずらっ子」として、いつも子どもたちの大将となって遊んでいました。近くの子どもを誘って、塀<sup>へい</sup>の上を下駄<sup>げ た</sup>のまま歩いたり、火の見櫓<sup>やぐら</sup>に登って大声をあげることもしていました。また喧嘩<sup>けん か</sup>も絶えず、常に母から強くたしなめられることも多かったものです。

## 学生時代 校内一の「暴れん坊」

このようにして少年時代を過ごした遵は、小学校を卒業し、日比谷の東京府立第一中学校（現・日比谷高等学校）へ進学しました。この頃の遵は相変わらず元気いっぱいの少年で、いたずら好きで喧嘩もよくし、先生にもよく叱<sup>しか</sup>られました。

そのためか、府立中学校から神田の共立学舎に転校し、中学校を卒業しました。

高等学校は、当時、日本で一番<sup>なん</sup>の難関<sup>かん</sup>と言われた第一高等学校（旧制）へ入学しました。そこには、「怪談」の物語などを書いた小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）や歌人で国文学者の落合直文といった近代日本文学史上さんぜんたる功績を残された有名な先生方がいました。

そこでもやはり腕白<sup>わんぱく</sup>な言動が目立ち、校内一の「暴れん坊」と言われました。そのころの高校生は、「バンカラ」といって高下駄<sup>たかげた</sup>をはき、破れた帽子<sup>ぼうし</sup>をわざとかぶり、肩で風を切って歩くのが一つの風潮となっていました。これは、純真<sup>かつたつ</sup>で明朗闊達な青年気質の強い表現でしたが、



現 東京大学赤門

そんな中でも<sup>したがう</sup>遵は、きわだって目立った存在でした。しかし、そんな元気のいい遵でしたが、決して弱いものをいじめたり、人の物をとったりすることなどはありませんでした。

第一高等学校を卒業すると、東京帝国大学（現・東京大学）に入学して、電気工学科に進学しました。

大学生になってからも、少年時代からの強い性格は相変わらずで、「けんか大将」で過ごしました。これは、遵が学校を卒業し、社会に出ていってからも少しも変わらず、「生涯を一貫して流れていた根性<sup>こんじょう</sup>」であったようです。

大学時代は、決して勉強一筋といったようなタイプの学生ではなく、学生生活を日々楽しんで過ごしていました。それにもかかわらず、頭脳は極めて明晰<sup>めいせき</sup>で、特に数学や物理が優れていて、ほとんど勉強しないわりには、真ん中から下にいったことはなかったということです。大学の同級生で、後に一緒に事業を進めた市川誠氏は、

「野口君は、学生時代から試験が近づいてもあまり勉強もしないで遊んでばかりいた。反対に私は勉強した方だが、それでも試験の結果は野口君に及ばなかった。」

というように語っています。



## 2. 社会人としての第一歩

### わが道を行く

そんな学生時代を過ごした<sup>したがう</sup>遵も、明治29年（1896年）3月、大学を卒業し、それまでに描い<sup>えが</sup>てきた理想の実現に向けて、社会人としての新たな第一歩を踏み出しました。

それはどのようなスタートだったのでしょうか。また、そのことが後の野口氏の事業家としての方向性にどのような意味をもっていたのか、見てみたいと思います。

大きな夢を抱いた若き野口氏が、就職先として最初に飛び込んだのは、福島県郡山で、橋本万衛門氏が経営していた郡山電灯会社でした。ここで技師長として水力発電所の建設にあたりました。

当時、東京帝大（現・東京大学）を卒業すると、官公庁や大会社に就職するというのが一般的であったのですが、野口氏は、そんなことには一向におかまいなく、中央から遠く離れた山里深い辺地の発電所を選び、そこを自分が描く理想実現の場として、仕事に没頭<sup>ぼっとう</sup>しました。

その後、野口氏は、いくつかの水力発電所を転々とし、発電の事業にかかわりますが、次に紹介するのは、野口氏が最初に赴任<sup>ふにん</sup>した郡山電灯会社から6年たってかかわった宇都宮電灯会社時代の様子です。

野口氏と一緒に働いていた人がこう語っています。

「もう50年も昔のことになります。思えば古い話ですが、物によっては、つい昨日の事のようにはっきり心に残っているものもあります。その当時、この地方で電灯がついていたのは日光だけでした。これは、ホテルにつけるために早くから電気があったのです。宇都宮や栃木にも日光から電気がくることになっていたのですが、いつまでたってもこないのです。宇都宮電灯会社という会社がありました。この会社は、まず初めに石那田<sup>いしなだ</sup>発電所という水力発電所を建設しました。場所は、宇都宮から日光街道を3里半（約14km）行っ



たところでは、機械は、150キロワットのドイツ製のものでした。建設現場に小屋を作って、宇都宮電灯の田辺技師、シーメンス商会売込主任野口工学士（野口<sup>したがつ</sup>遵）それに私の3人で寝泊りしていました。私は電柱材や水路、発電所木材を一手に引き受けて、建設工事に関係しておりました。三人とも若かったですが、野口さんは私より四つばかり年上でした。

当時の野口さんは、一口にいえば<sup>ちやくじょうけいこう</sup>直情径行 そのものともいう感じの人でした。行動は何事であれ、<sup>てっぽうだま</sup>鉄砲玉のような具合で、二歩進んでは一歩考えるというような手ぬるいことは決してしない人でした。

当時の野口さんは、我々によく寝物語をしたものです。今でも覚えておりますが、

『自分にはもう父はいない、母だけだ。』

という身の上話やら、

『日本には石油や石炭は大してないから水力電気で国を<sup>はんえい</sup>繁栄させなければならない。』

というようなことをよく聞かされました。

<sup>いしなだ</sup>石那田発電所は大変風変わりな発電所で、落差35尺（約10.5m）でちょうど中間の17尺（5.25m）の所に水車があります。これであまく電気ができるのだろうかと思議に思って、野口さんに聞いたら、

『<sup>りくつ</sup>理屈の分からない者には困るな。』

と笑っておりました。

なにしろ土地の物知りの言うには

『<sup>こうし</sup>孔子も<sup>すいかあいい</sup>水火相容れずと言っている。水で明かりを<sup>とも</sup>灯すなどできるはずはない。こんなことを考える人達は気が少し変なのではないか、それとも孔子より<sup>えら</sup>偉いかどちらかだ。』  
などと言われました。』

このような話から、次のようなことが言えそうです。

これからの日本の工業を盛んにするには、電気が必要になってくる。しかし日本には石油や石炭は大してないから水力発電で国を繁栄させなければならないと大学を卒業したての若き野口氏はそう考えています。現実を見すえた合理的な考え方であり、まだ若いのに、さすがに目の付けどころが違うと思います。

さらに、肩書きや<sup>めいよ</sup>名誉に一向にかまわず、本当に自分のやりたいこと、これだと信じたことは誰が何と言おうと<sup>わきめ</sup>脇目も<sup>すいこう</sup>ふらずに遂行していく、たとえそれが未開の<sup>こやが</sup>辺地で小屋掛けの生活であってもです。野口氏の選んだその仕事とは発電事業だったのです。

後の野口氏の<sup>しょうがい</sup>生涯をかけた事業が、発電、工場建設のサイクルで展開していきました。その出発点が、郡山電灯会社や宇都宮電灯会社だったといえます。後の野口氏の事業の<sup>きばん</sup>基盤がここで<sup>つちか</sup>培われたといえそうです。

また、さきに述べた話では、水力発電に関して土地の物知りの話が紹介されています。話としては、大変おもしろ味がありますが、これが当時の国民の<sup>にんしき</sup>一般的な認識だったのです。

# 3. 事業家としての基礎をみかく

## シーメンス会社へ入社

そのようにして、<sup>こおりやま</sup>郡山電灯会社に2年間勤務していた野口氏でしたが、父の死去で退社し、家族のいる東京へ帰り、明治34年（1901年）にドイツのシーメンス・シュケルト会社の日本出張所に入社しました。

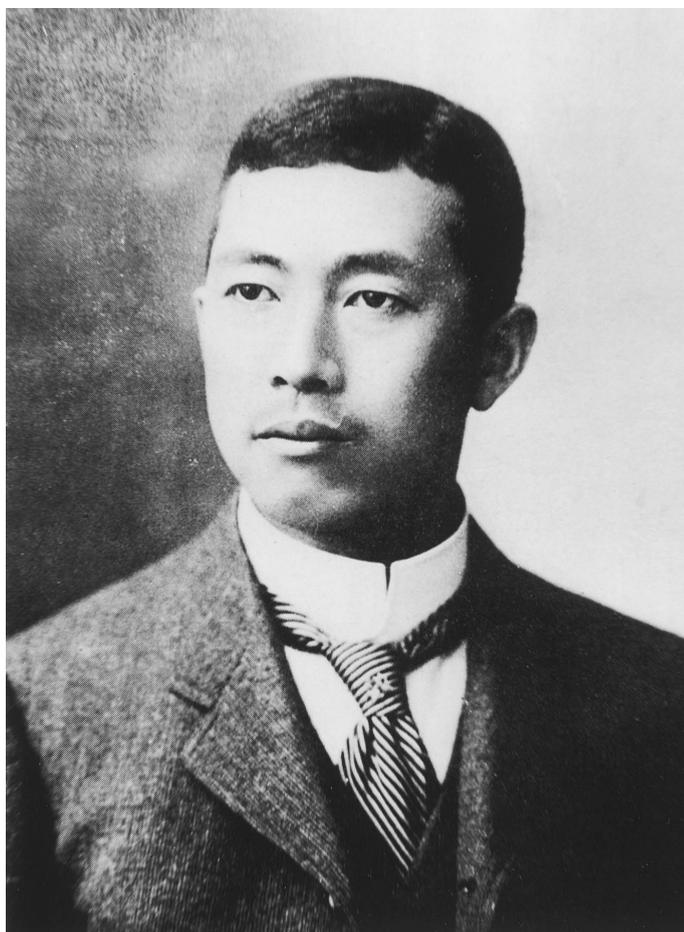
このことが、野口氏のこれからの人生に大きな<sup>てんかん</sup>転換をもたらすことになるのでした。つまり、父の夢は大きな志を実現することでしたので、父の意志を<sup>つ</sup>継ぐためにも、そして自分の無限の可能性を引き出すためにもこの入社が絶好の機会となったのでした。

シーメンス会社は、世界最大で最も伝統のある電気機械器具製造販売<sup>はんばい</sup>会社で、交流発電機を発明したシーメンス氏が創立した会社でした。電気を発明したエジソンもシーメンスと同時代の人でした。

この東京支社のヘルマン支配人は、優秀な技能者であり、電気技術者として世界的に有名な人でした。野口氏は、このヘルマン氏のもとで指導を受けながら機械の<sup>す</sup>据え付けや工事の設計などの技術を学び、電気事業の実地修練を積み重ねました。特に電気事業界との交流を広め、<sup>うけおい</sup>請負の仕方や水利権、特許権についての知識を深めました。

当時の野口氏の印象として、「切れ長の目の鋭い、イガグリ頭の<sup>せいけん</sup>精悍そうな男で、いかにも<sup>どうし</sup>闘志満々、すこぶる向こう意気が強く、万事を力で押していくような人であった」と伝えられています。野口氏が日々の仕事に意欲を燃やし精一杯取り組んでいる姿がほうふつされます。

シーメンスでの勤務は3年で終わりましたが、この間にシーメンスの幹部から受けた大きな信頼と学んだ技術は、後の事業や海外から石灰<sup>ちっそ</sup>窒素の技術を導入するのに大きく役立つことになりました。



野口 遵（33歳当時）

# 4. 事業家としての第一歩

## そき 曾木電気株式会社を創立

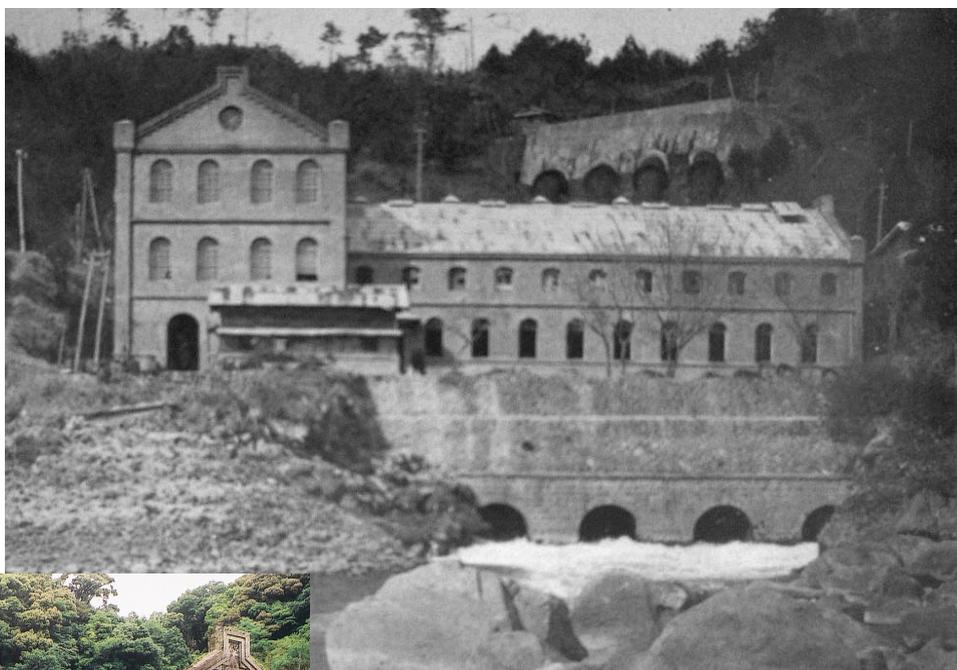
明治39年（1906年）1月、野口氏は鹿児島県伊佐郡大口村（現・大口市）に、曾木電気株式会社を創立し、事業家（経営者）としての第一歩を踏み出しました。これが日本化学工業のパイオニアとして、日本はもちろん朝鮮にまで一大発展を遂げるきっかけとなったのです。

野口氏は事業家としていつかは自分の夢を実現したいと思っていました。その第一歩として踏み出したのが、この曾木電気株式会社の創立でした。これに野口氏は今までやってきた研究をなんとかして軌道に乗せたかったのです。

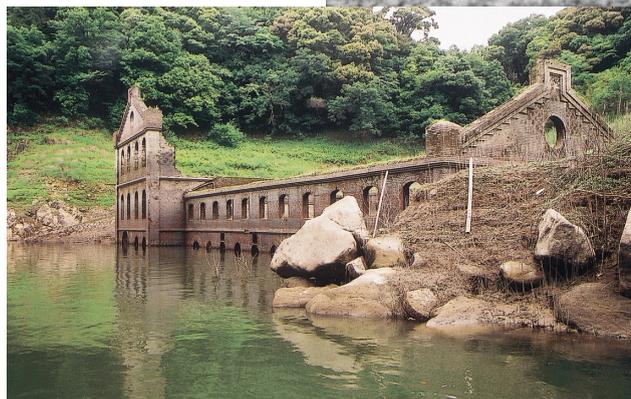
薩南地方の一隅に産声を上げた電気会社がこのようにして活動しはじめたのでした。

この曾木滝の水力発電は、わずか800キロワットにしすぎませんでした。近くの金山や町村では消費しきれず、水俣へ送電し使用されました。発電所開設によって、近隣町村の山里の家庭にも明かりが灯されたのでした。

野口氏は、心ひそかに喜びと誇りを感じ、自分が生涯をかけてやらなければならない仕事があることを強く自覚しました。



当時の曾木発電所



下流にダムができ、水量が減る夏場にだけ、  
ダムの湖底から姿を現す曾木発電所跡。  
(鹿児島県大口市提供)

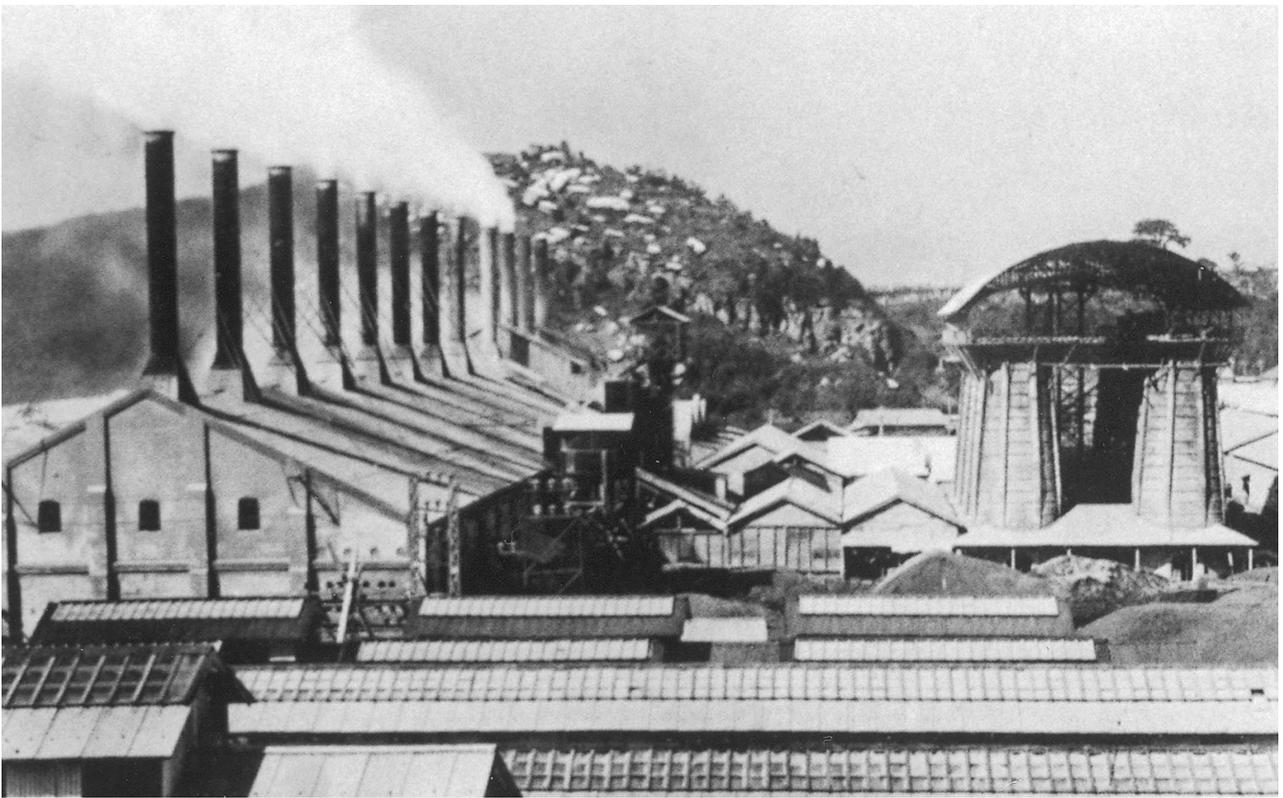
## 日本カーバイド商会を設立

次に野口氏は、明治41年（1908年）日本カーバイド商会を設立し、熊本<sup>あしきた</sup>県<sup>みなまた</sup>葦北郡水俣村（現・水俣市）にカーバイド製造工場をつくりました。

野口氏がカーバイドに目を付けたのは、東京帝大を卒業して福島<sup>こおりやま</sup>県の郡山電灯会社に勤務していたころでした。シーメンス会社に勤めていたころにも、常に石灰を持ち歩いて研究をしていました。家に持ち込んでカーバイドの研究をするのでひどい臭<sup>しゅうき</sup>気<sup>なや</sup>に悩まされました。

「今から考えると、後に兄の事業の基<sup>もと</sup>になった石灰窒素<sup>ちっそ</sup>の前身がこのカーバイドだったのです。」

と野口氏の弟は語っています。



水俣カーバイド工場

## 石灰窒素製造の特許権を取得

水俣工場でカーバイドの製造を開始しましたが、期待したような品質のよいカーバイドを生産することができませんでした。

この時、野口氏は事業発展の上にさらに新分野をひらく良い機会を得ました。それは、明治

39年（1906年）二人のドイツ人フランク氏、カロー氏の両氏が石灰窒素製造法を発明したことにあります。それは、カーバイドを原料としてこれに空気中の窒素を吸収化合させて窒素肥料を製造するものです。植物の三大栄養素の一つである窒素の役割は大きいことは言うまでもありません。画期的な大発明でした。

「わが事業の進展は、この特許権を握ることだ。」

と野口氏は考えたのでした。

先見の明には、まさに驚くものがありました。

ところで、先見性や決断力は一体どこから生じるのでしょうか。科学者としてのひらめき、これまで苦勞して積み重ねてきたカーバイドに関する研究の裏打ち等が先見性や決断力のもとになったのではないかと考えます。

その当時は、一般に化学工業の知識に乏しく、石灰窒素が何であるかわからず、このような新発明の事業に莫大な金を投資することは最も危険なことであると思われていたのです。にもかかわらず野口氏は、全く何も迷うことなく確固たる信念をもってこの特許取得のためにドイツにおもむき、すでにイタリアに売られていた特許をシーメンスの協力もあって買収に成功しました。

大事業家としての手腕は、この時すでに発揮されていたのです。

実はこの特許を日本の他の会社も欲しがっていました。財閥の三井でした。

「三井は大金持ちだ。おれは貧乏だ。しかし、カーバイドを扱ってきた経験がある。三井がやるとすれば、まず、発電所からつくらねばならない。三井は特許だけ買ってそれは死にものだ。金がほしいなら三井へ売れ。仕事本位ならおれにまかせよ。」

と野口氏は発明者にこう説得し、特許取得に成功しています。



特許権取得のうわさが伝わると「空気から窒素ちっそをとり肥料を作る。」ということで世間はあつと驚いたのです。

野口氏は明治41年（1908年）8月、日本カーバイド商會を合併して、社名を日本窒素肥料株式会社と改め、カーバイド並びに石灰窒素の製造をはじめました。

このようにして、日本窒素会社は誕生したものの言葉に絶するほど経営は困難でした。

しかし、明治42年（1909年）1月、石灰窒素水俣工場みなまたを完成させ石灰窒素の製造にこぎつけました。ところが、その製品に予期せぬことが起こったのです。18%あるはずべき窒素含有量がんゆうりょうがわずか10%しかなく、その上、生産量も思うようにはあがりませんでした。

この石灰窒素を造るとき、彼がいつも気にしていたのは、いかにして含有窒素の純度を高いものにするかであり、これが農民の信用にむすびつくことを心得ていたのです。

今まで、石灰窒素という肥料名は、日本ではだれも聞いたことのない新肥料であり、どのようにして使うかも知らなかったのです。豆粕まめかすや魚肥ぎょひのように直接植物に与えると、すぐ枯れてしまう危険性もあるのです。これを普通の肥料のように農民に広めていくことは容易なことではありません。また、この肥料を販売する人ですら、この新肥料に関する知識が不十分だったのでなおさらでした。そこで、いかにして植物を枯れさせず、農民の使いやすいものを造るかが石灰窒素肥料の課題でした。

野口氏は、肥料を使う人の立場に立って研究に精根をこめていきました。研究の結果、石灰窒素を變成して硫酸りゅうあんアンモニウムという肥料にすると良いことがわかりました。大阪に工場を建てました。

しかし、肝心かんじんの石灰窒素の品質が悪く、生産もうまくいきませんでした。

そこで、野口氏は今まで依頼して造らせていた石灰窒素を、自ら水俣工場に乗り込んで製造法の改造に当たることにしたのです。野口氏はその時、次のように決意を述べています。

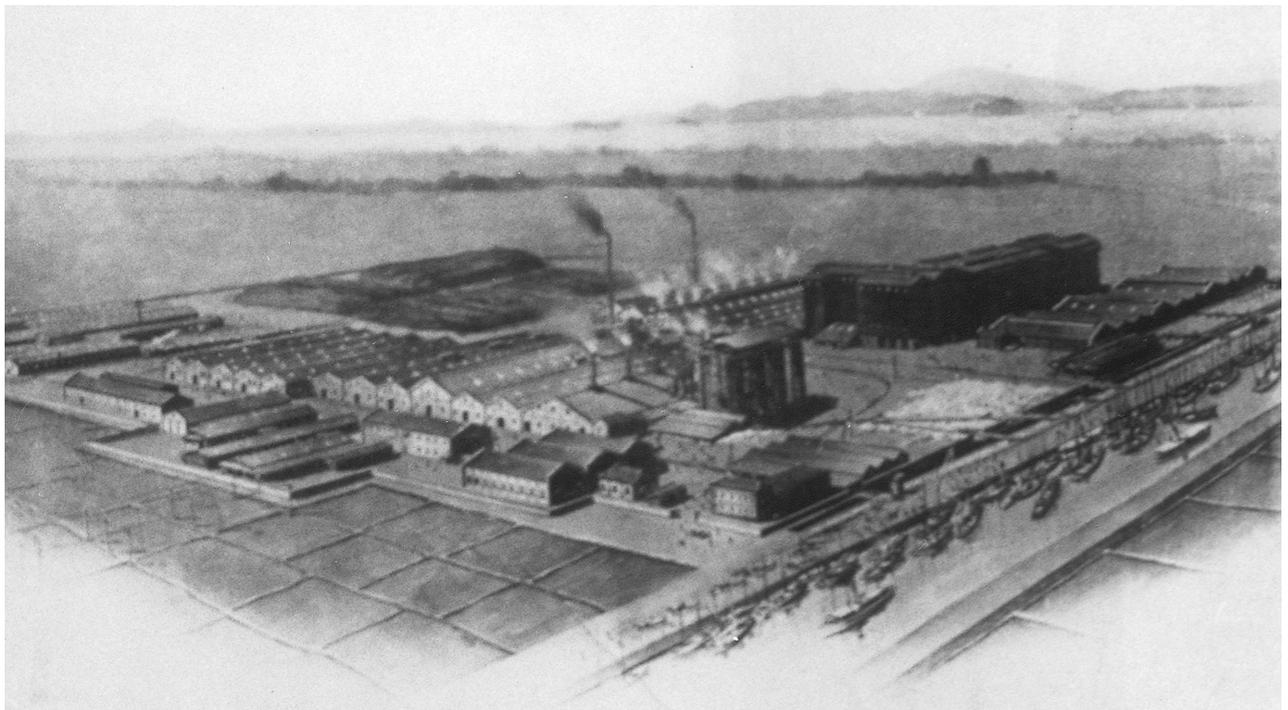
「今度は生きるか死ぬか生命をかけてやる。もし失敗したら日本にいない。アメリカへ渡わたって皿洗いから出なおす。」

## 5. 事業家としての躍進

みなまた  
水俣工場における野口氏は、品質改良のため昼も夜も不眠不休の努力をつづけ、文字通り寝食を忘れて研究に没頭ぼつとうしました。何か良いアイデアがうかぶと夜中でも飛び起きて、寝巻のまま工場にかけつけるありさまでした。その結果として、カーバイドの品質は上がり、これまで製造工程で最も難しいとされていた石灰窒素ちっその電気炉ろも改善され、操作も順調になって多年の苦心はむくわれました。

### 鏡工場を建設

このように石灰窒素の製造に成功した野口氏は、さらに、出力7000キロワットの白川発電所（熊本県阿蘇郡）と鏡町（現・熊本県八代市）りゅうあんに硫安製造の鏡工場を建設したのでした。ここでの製造工程は、カーバイドから硫安という製品が一貫した流れ作業で造られるもので、今でいうオートメーションシステムでした。



建設当時の鏡工場

大正3年（1914年）5月、その日は、野口氏をはじめ従業員全員が徹夜てつやで製造運転に当たっていましたが、夜更けにおよび、長い間待ち望んだ純白で雪をもあざむくような硫安が、1トンばかり造られた時には野口氏を取り巻いて思わず歓声かんせいがあがったものでした。



これこそ、日本における空中窒素固定法による<sup>ちっそ</sup>硫酸アンモニウム<sup>りゅうさん</sup>であり、わが国の化学工業界に一大センセーションを巻き起こす記念すべきできごとでした。

そのころから、わが国の<sup>りゅうあん</sup>硫安の需要が次第に増加しはじめました。それまでは、ほとんど値段の高い輸入品にたよっていたのでした。野口氏はこの硫安を日本窒素鏡工場で造り、はじめて自家発電による窒素肥料工場となりました。

鏡工場の硫安の売れ行きは順調で大変良く採算もとれるようになりました。創立以来、約10年間で、日本窒素会社は確実な歩みをたどるようになりました。その間、第一次世界大戦でわが国の景気は良くなり、硫安の値段も上がり野口氏は次々と事業を拡大していきました。野口氏の事業家としての熱意と努力に拍車がかかりました。この発展は、まさに<sup>でんこうせつか</sup>電光石火<sup>はやわざ</sup>の早業であったと言われています。

大正7年、野口氏は肺炎にかかり、一時は重症に陥り、生死を危ぶまれましたが、幸いにして、何とか全快しました。

元気は取り戻したものの、第一次世界大戦後の世界経済の大混乱は、日本にも大きな<sup>えいきょう</sup>影響を及ぼし、再び世の中が不景気になり、株価も暴落してしまいました。このことが、野口氏の事業に影響を及ぼさないはずはありません。外国産の価格の安い硫安が大量に輸入され、国産硫安の<sup>じゅうよう</sup>需要が落ち込みました。しかも、石灰窒素の特許期間も、そろそろ満期になろうとしていたのでした。

この行き詰まりかけた状態を打開するのと、新しい技術の調査をめざして、大正10年（1921年）野口氏はヨーロッパ旅行に出発しました。そこで見つけたのが、水と空気を原料として肥料を造るカザレー式アンモニア合成法でした。

# カザレー式アンモニア合成法の特許権を取得

野口氏はヨーロッパ旅行中イタリアの化学者ルイギ・カザレー博士と出会う機会に恵まれました。そして運よくもカザレー博士の発明したカザレー式アンモニア合成法の特許権を得ることに成功したのです。

カザレー博士と出会ったことは偶然の出来事であり、思いがけない収穫<sup>しゅうかく</sup>であったとしか言いようがありませんでした。

イタリアのテルニーにあるイドルス工場を見学できたことは野口氏にとって大きな喜びでありました。カザレー博士のアンモニア合成はこの小規模工場で行われていたのです。

野口氏はここで、アンモニアの臭気<sup>しゅうき</sup>に魅<sup>み</sup>せられてしまったのです。

「これはものになる。」

と思いました。

野口氏はただちにカザレー博士と特許権を手に入れるための交渉に入りました。

その当時のイタリアはインフレーションで貨幣価値<sup>かへい</sup>が下落していましたが、1千万リラ（現在では約10億円）ならこの権利をゆずってもよいとのことでした。権利取得に時間をかけすぎてせっかくのチャンスを逃してはならないと思い、取得の話を進めました。

しかし、権利取得<sup>はら</sup>の肚は決めたものの、なにさま1千万リラという大金のかかる交渉であったため、自分一人で決定するというわけにはいかず、2週間<sup>ゆうよ</sup>の猶予をもらい、スイスのベルンへ行き、そこから大阪の日本窒素<sup>ちっそ</sup>本社へ連絡をとりました。

野口氏の決断は早く、会社の承諾<sup>しょうだく</sup>を得ると、すぐローマに引き返し1億円の手付け金を支払い仮契約<sup>けいやく</sup>を結んで帰国しました。

大正10年（1921年）12月、野口氏は再びイタリアに行き、カザレー博士との間に合成法の特許権およびこれに関するいっさいの機械類<sup>こうにゆう</sup>購入の契約書に調印しました。

特許権取得に大金をつぎ込む決断と勇氣は彼に先見の明があったからです。この特許権取得が後の野口氏の事業をゆるぎないものにしていくことになりました。



カザレー博士

# 6.延岡工場建設・市発展の基礎を築く

## 新工場の敷地さがし

ヨーロッパから帰国した野口氏は、さっそく、大正11年（1922年）、熊本県の鏡工場に隣接して念願のカザレー式アンモニア合成工場を建設しようと計画しました。

当時、わが国で造られていた肥料は、値段の高い<sup>りゅうあん</sup>硫酸がほとんどでした。そこへ外国産の安い硫酸が大量に入り始めました。外国産より安くて品質の良い硫酸の製造が求められていました。これを可能にするには、新たにカザレー式アンモニア合成工場を建設する必要があったのです。

その製造方法は、水と空気を合成してアンモニアをつくり硫酸と反応させて硫酸をつくる方法です。

鏡工場ではすでに硫酸を製造していましたが、高圧合成工場の危険をおそれ、農漁民の反対<sup>そうぐう</sup>に遭遇しました。

3月10日に鏡工場で新工場建設の起工式を行いました。排水の問題で地元の承認が得られず工場建設を断念せざるをえませんでした。

せっかく大金をかけて、外国から特許を買いましたが、その工場をつくるのに敷地<sup>しきち</sup>がなくてはどうにもなりません。新工場をつくるのに適した良い場所をさがすことになりました。

## 延岡の恵まれた自然条件

アンモニア製造には、その原料となる豊かな水と空気、それに大量の電力が欠かせません。

わがふるさと延岡は、「水郷延岡」<sup>すいごう</sup>として、今でもその名が遠くまで響<sup>ひび</sup>いています。

高千穂、日之影、北方から延岡へ流れ下る五ヶ瀬川水系で電源開発を行えば大量の電力が手に入ります。これまで、多くのダムを造り、電源開発を手がけてきた、日本一のパイオニア野口氏がここに目をつけぬはずはありません。

肥料の原材料になる水と空気と電気を手に入れるのに最も恵まれた場所それが延岡だったのです。



延岡の風物「鮎やな」

## 五ヶ瀬川電力株式会社の設立

鏡工場に新工場の建設が計画された3年前、つまり、大正8年（1919年）の春、宮崎県選出の衆議院議員長峰与市ながみね よいち氏は、電力開発により宮崎県に工場を誘致ゆうちしようと運動を行っていました。政友会（当時の政党）の中橋徳五郎氏（日本窒素肥料株式会社初代会長）を訪ね

「宮崎県内に工場を誘致したいのでご協力をお願いします。」

と申し入れ、五ヶ瀬川水力発電の有利性を説きました。

すると中橋氏は

「日本窒素に野口したがう 遵 という、すぐれた事業家がいる。野口氏にあって話をしなさい。」

と紹介してくれました。

さっそく、野口氏に会って話したところ

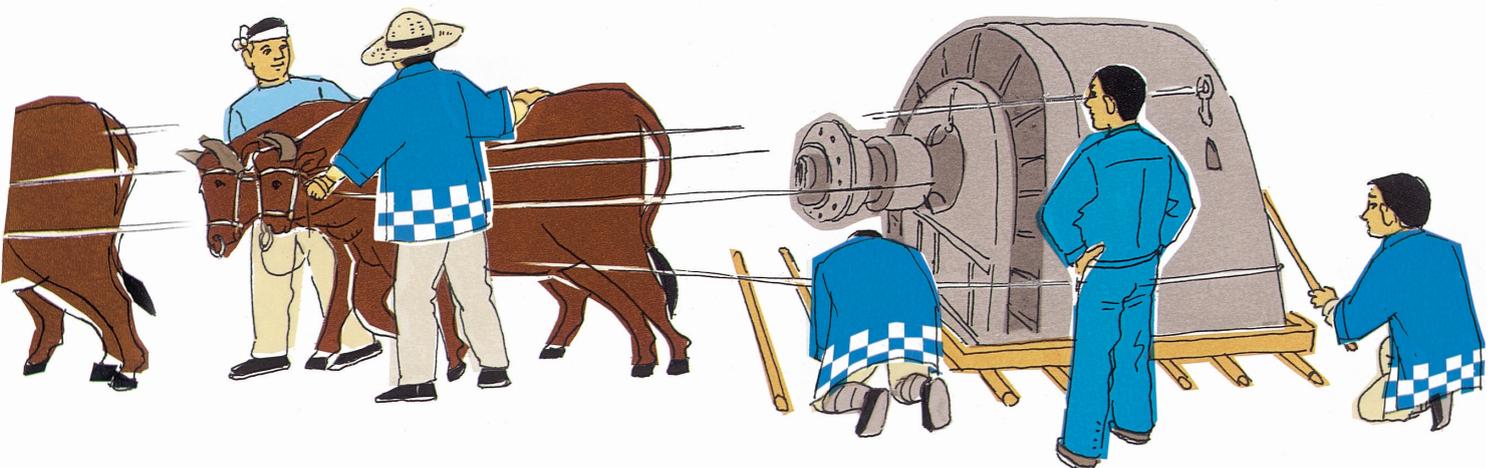
「すぐ調査しよう。」

ということになりました。

調査の結果、発電所建設にきわめて有利であることがわかり、大正9年（1920年）5月、五ヶ瀬川電力株式会社を延岡町新町に設立、日之影に発電所を建設することにしました。この時、長峰氏に協力したのが恒富村平原ひらばるの村会議員山本彌右衛門やえもん氏でした。

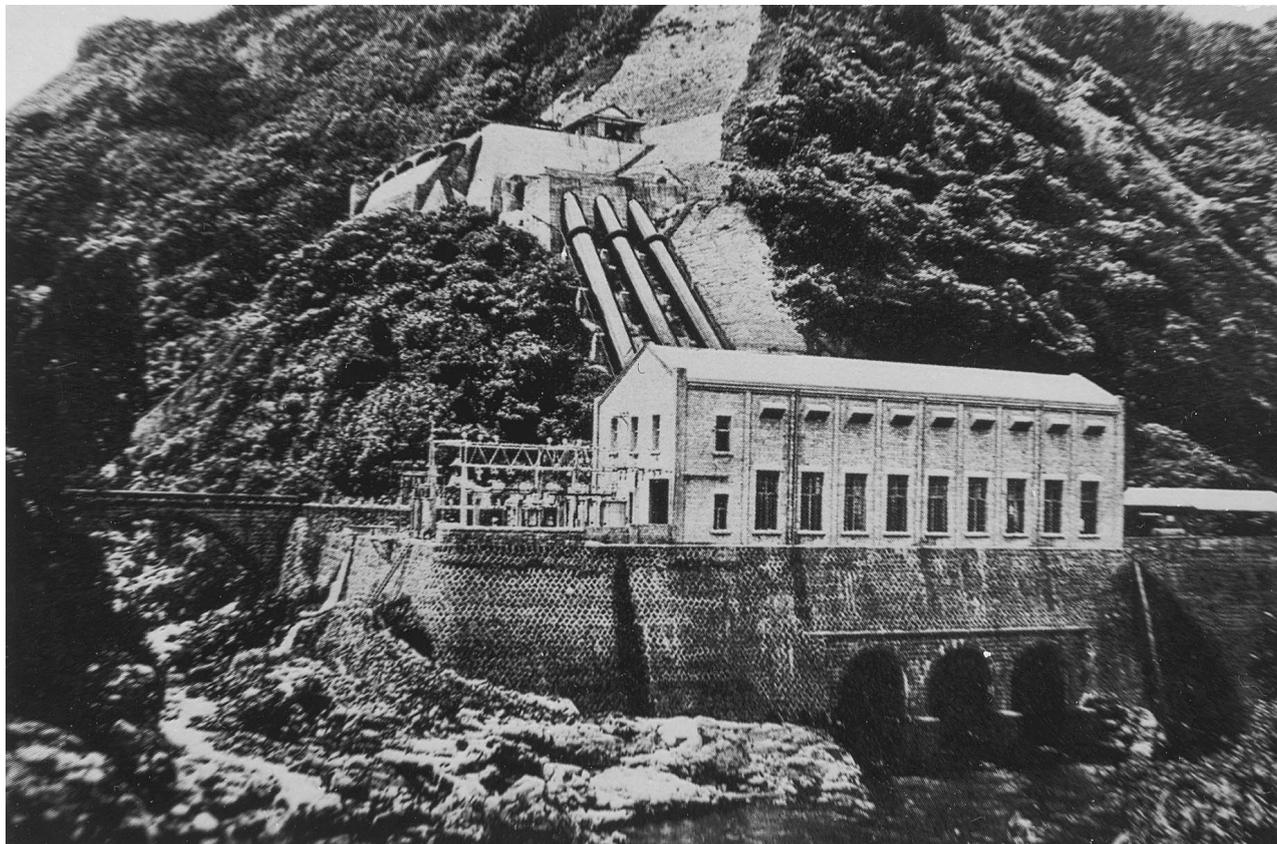
大正9年（1920年）夏7月、炎天下での発電所建設は容易なものではなく、川舟を利用したり、発電機等の重いものは牛で原始的な「コロ引き」という方法で運んだり、セメントは馬車で運んだりしました。

このような困難な状況じょうきょうのもとで、五ヶ瀬川水力発電所の建設工事が進められました。



当時の延岡は、鉄道もなく、馬車が主な交通機関であって、全く交通不便な片田舎<sup>かた いなか</sup>でした。宮崎と延岡を往来するにも船や馬車が使われていた時代です。

発電所は大正14年（1925年）8月に完成し、その後日本窒素肥料株式会社<sup>ちっそ</sup>が買取り、1万2千キロワットの電気は延岡の肥料工場に送電されました。



五ヶ瀬川水力発電所（現日之影町）

## 工場の誘致<sup>ゆうち</sup>と地元有志<sup>じんりょく</sup>の尽力

さきに、野口氏はカザレー式アンモニア合成工場を熊本県の鏡工場に建設しようとしたが、うまくいかず計画を断念したことを述べました。

野口氏が工場の敷地<sup>しきち</sup>さがしに延岡を訪れたのは大正11年（1922年）3月でした。時あたかも五ヶ瀬川発電所の建設が進められていた時期でした。

当時の延岡は見渡すかぎり田畑が広がる田園地帯で工場用地には事欠きませんでした。

野口氏が延岡で最初に会ったのは、五ヶ瀬川電力株式会社の重役山本彌右衛門氏<sup>やえもん</sup>（恒富村議）でした。その後、恒富村役場にも行きました。役場では野口氏を愛宕山に案内して町並みを展望したところ、野口氏は持っていたステッキで恒富地区の現・旭化成薬品工場のところを示し、ぐるりと輪を描くようにして



「これくらいの敷地しきちがほしい。」

と言われたという話が伝わっています。そのスケールの大きさに、同行した人々はびっくりしました。

3月26日、野口氏は日本窒素大阪本社ちっそに帰り、新しい肥料工場の建設地について協議し、「日本窒素の新肥料工場は、延岡に建設する」と正式に決定しました。

野口氏が延岡に新しい肥料工場をつくろうとした時、地元有志の積極的な協力がみられました。

恒富村長の日吉幾治氏いくじ、村会議員の山本彌右衛門氏やえもん、三宅忠巳氏ただみ、志賀輝雄氏てるお、門馬豊次氏もんまとよじ、笠原鷺太郎氏かさはらわたろうらをはじめとする地元有志の人々です。

これらの人々は、村議会で工場誘致ゆうちの重要性を説き、工場用地の確保に積極的にじんりよく尽力されました。延岡の将来の発展を考えると、工場を誘致することが大切であると考えたのです。

延岡に肥料工場の誘致が決定し、工場敷地の買収が始まると、奇妙な「うわさ」が広まりました。

「新しくできる肥料工場は、空気から窒素を取るので、延岡付近の空気は薄くなる。」

「爆発ばくはつしたら、四方八方吹き飛んでしまう。」  
などというものがあり



「土地は売るな。」

という声も出るほどでした。

この話が村議会で持ち出されたとき、東京帝大出身で元内藤家が経営する日平銅山ひびらの技師長であった笠原議員かさはらはわかりやすく科学的な説明をし、

「熊本の鏡工場をみれば理解できる。」

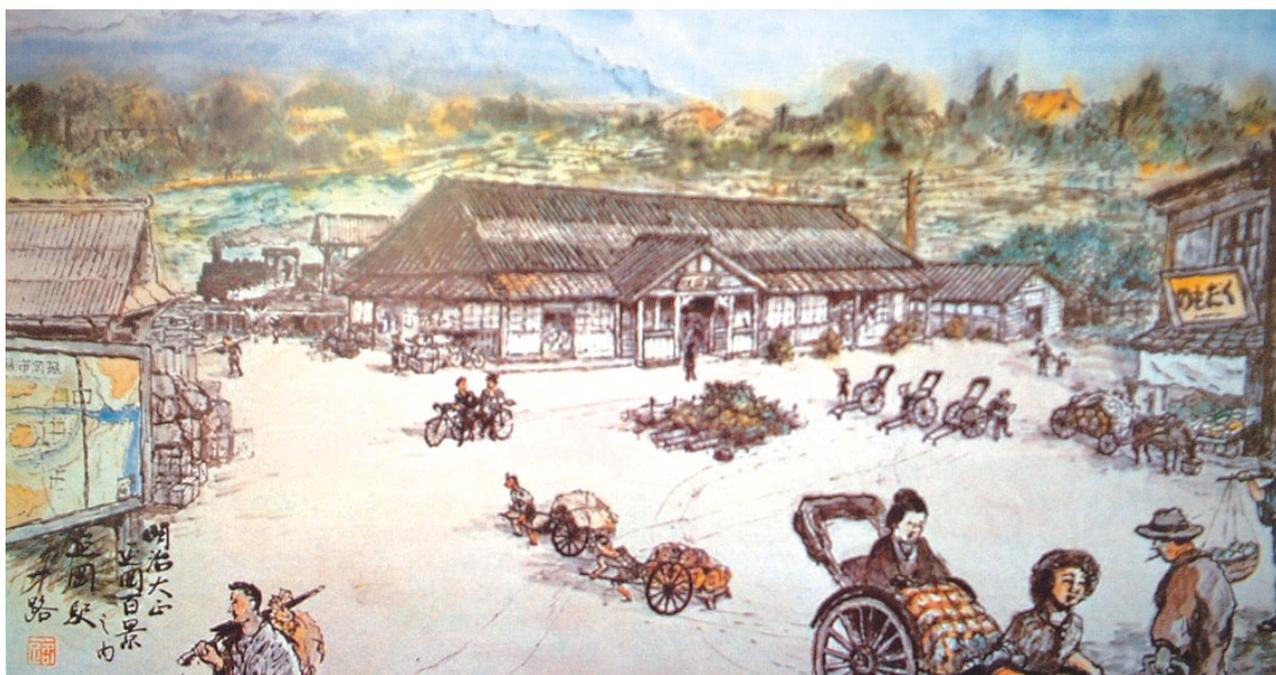
と提案し、工場視察を実施して視察団を安心させました。さらにこの後、視察議員を中心に悪質デマを打ち消すのに各地区をまわり、工場用地買収をわずか4ヶ月で終了させています。

工場誘致ゆうちにかかわって、村長はじめ、地元有志ゆうしの人々の郷土を思う熱い情熱と延岡の将来の発展を見通した先見性を感じます。

また、地元有志の人々は、ほとんどが亮天社りょうてんしゃ（内藤家の私学校）の出身でもありました。

このように、延岡に新しい肥料工場ができるまでのいきさつを見てきますと、中学生のみなさんは、新しい肥料工場が延岡に偶然ぐうぜんに誕生したのではないことに気付かれたと思います。

このようにして、大正11年（1922年）8月に世界最初のカザレー式アンモニア合成工場が延岡に建設されるようになったのです。



大正時代、開通した頃の延岡駅（延岡百景 今と昔より）

鉄道の早期建設も要望され、大正12年（1923年）12月、国鉄日豊線にっぽうが全線開通し、工場発展の大きな追い風となりました。

以上、なぜ延岡に旭化成の前身である肥料工場が誕生したのか、そのいきさつを見てきました。まとめてみると、

まず第一に、外国産より安く品質の良い肥料をつくりたい。そのためには悪臭あくしゅうの出ないカザレー式製造法が最も適していること。熊本の鏡に新しい工場を建設してそこで製造しようとし

たが、地元の承認が得られず別の土地に変更しなければならない事情があり、工場の敷地<sup>しきち</sup>さがしをしていたことです。

第二に、延岡の恵まれた自然条件が、肥料の製造に適していたことです。肥料の原材料になる豊かな水と空気、当時建設中の五ヶ瀬川発電の大量の電力が期待できます。

第三に、工場用地の確保と地元の受け入れ体制にかかわることです。地元有志の熱い郷土への思いと先見性が工場誘致<sup>ゆうち</sup>を可能にし、後の延岡の発展に結びついたのでした。

## 工場完成から稼働<sup>かどう</sup>までの苦難

大正12年（1923年）9月、工場は完成しましたが、稼働（機械が動き、生産を開始する）にこぎつけるまでには、解決しなければならない課題が山積していました。それは、圧縮機、合成塔<sup>とう</sup>、循環機<sup>じゆんかんき</sup>等の機械設備に関するもの、さらに技術者養成に関するものでした。

野口氏は全国から優秀な若い技術者<sup>ゆうしゆう</sup>を集めました。750気圧の高圧下、もし事故が起きれば、間違いなく命はありません。技術者たちは、覚悟<sup>かくご</sup>を決め水杯<sup>さかずき</sup>をあげてから工場へ通いました。彼らはまさにサムライだったのでした。



創業当時の技術者たち（愛宕山下）

彼らの力なくしてアンモニア合成の実用化はなかったでしょう。一方、機械施設の方も悪戦苦闘くとうの試験作業を繰り返しながら、工夫改善を加え、ついに完成品にまでこぎつけました。



アンモニア合成塔とう（設置当初のカザレー広場）

世界の科学者の注目が集まる中、大正12年(1923年)10月5日午後4時半、秋の陽がようやく西に傾かたむいた頃、延岡愛宕山のふもと日本窒素延岡工場(現・薬品工場)内から大きなどよめきが起こりました。

「ばんざい！」

「アンモニアができた!!」

みんなは肩を抱き合い、興奮とうれしさで顔はクシャクシャになっていました。発明者カザレー博士立ち会いのもと、日本で最初に合成アンモニアが誕生した感激のいつしゅん一瞬でした。

これは、わが国の化学工業史に残る一大壮挙そうきよでありました。同時にまた、わがふるさと延岡にとって、近代工業都市化への黎明れいめい(夜明け)だったのです。



## 工場の拡張・発展

アンモニア合成の成功によって、日本窒素<sup>ちっそ</sup>延岡工場は、ベンベルグ、レーヨン、火薬工場などを相次いで建設していきました。

すでに大正11年（1922年）5月に野口氏は喜多又蔵<sup>きまたまたぞう</sup>氏（日本綿花社長）と共同で旭絹織<sup>あさひけんしょく</sup>株式会社を設立しています。

これには、かつて、野口氏がイタリアでレーヨン人造絹糸<sup>けんし</sup>を見て、その品質の良さに期待をかけて帰国し、人造絹糸の有望なことを説いたが耳を傾ける人は少なかったといういきさつがありました。

レーヨン工場延岡進出の話が出たのは大正13年（1924年）5月でした。地元延岡ではすぐに

大正末期の薬品工場▶



現在の薬品工場



◀昭和初期のベンベルグ工場



現在のベンベルグ工場

ゆうち 誘致運動が始まりました。特に岡富村（かわすみたましち 川澄民七村長）が熱心でした。野口氏は、祝子川の水のきれいさに目をつけ、岡富村と工場敷地（しきち 中川原一帯39万6千平方メートル）に関して売買契約（けいやく）を結びました。

工場着工まもなく、会社の資金難のため工事がストップし、建設のめどが立たなくなってしまいました。

岡富村民は、田畑を失って生活に困っていたため、役場へ押しかけ、工事を再開してもらおう（ちんじょう）よう陳情したりしました。

話は変わりますが、野口氏は昭和3年（1928年）11月にニューヨークへ行きドイツのベンベルグ会社のブリュートゲン氏との間に、ベンベルグ絹糸の特許（けんし）の契約を結びました。翌、昭和4年（1929年）には資本金1,000万円で日本ベンベルグ絹糸株式会社の建設にとりかかりました。

今度は、ベンベルグ工場を岡富村につくるというニュースが流れましたが、一転して、恒富村に変わりました。

ベンベルグ工場進出に恒富村は、こおどりして喜びましたが、野口氏の示した条件は工場の敷地<sup>しきち むしよう</sup>を無償で提供することでした。村にそんなお金があるはずはありません。そこで、野口氏はもう一つ提案しました。

「もし、来年（昭和5年（1930年）4月までに、恒富村、岡富村、延岡町<sup>がっぺい</sup>が合併すれば工場の敷地代は、そっくり寄付<sup>きふ</sup>しましょう。」

当時の延岡は、まだ延岡町（川中地区）、岡富村（川北地区）、恒富村（川南地区）の1町2村に分かれていました。3町村がバラバラでは将来ここに、一大工業地帯を建設しようと考えて

昭和初期のレーヨン工場▶



平成12年頃のレーヨン工場（平成13年9月操業停止）

いる野口氏にとって、何かと不便でした。

野口氏のこの一言で、合併の気運が一気に盛り上がりました。昭和5年（1930年）4月、新しい延岡町が誕生しました。（延岡が市になったのは、それから3年後の昭和8年（1933年）2月11日です。）

ベンベルグ工場は、予定どおり、昭和6年（1931年）4月に完成しました。

建設を中断していたレーヨン工場も昭和8年（1933年）12月に完成、操業を開始しました。

レーヨン工場には、延岡市内はもとより、県内外から多くの従業員が集まり、昔は三軒家と呼ばれ淋しかった工場周辺にもいろいろな商店などが次々にでき活気にあふれるようになりました。

また、社員を大事にするという野口氏の思想によりベンベルグとレーヨン工場には鉄筋コンクリート造3階建て、水洗トイレ付きのモダンな女子寄宿舎が建設されました。

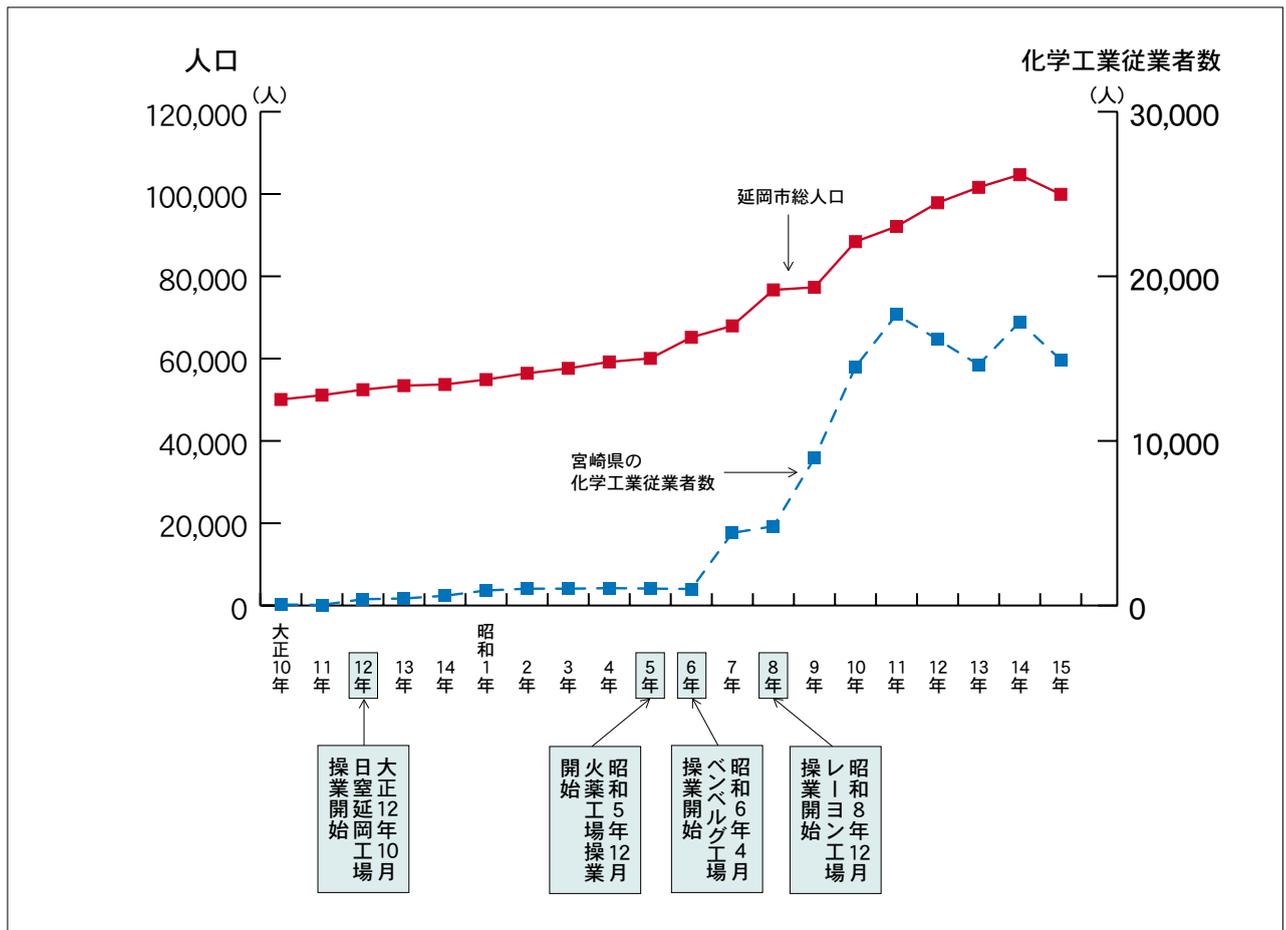
そこでは県内外から集まった多くの女子従業員が生活し、休日や夜間にはお茶、お華、料理などの、当時としてはきわめて珍しい教養講座も開設されました。



◀昭和初期の火薬工場（現在は化薬工場）



現在の化薬工場



延岡市総人口と宮崎県の化学工業の従業者数 (宮崎県累年統計書 昭和33年刊行)

また、昭和23年（1948年）には、岡富小学校から分離して旭小学校が、昭和31年（1956年）には、岡富中学校から分離して、旭中学校が開校し、多いときには、旭小で約1,800名、旭中で900名余りの児童生徒が通い、その3～4割が旭化成の従業員の子ども達でした。

この旭小学校、旭中学校は、旭化成の名前にちなんで付けられたもので、いかに、野口氏が設立した旭化成が延岡の街そして延岡の教育にも大きな影響を与えたかがわかります。

ベンベルグ工場建設と前後して、昭和5年（1930年）12月に、東海村（甲斐伊佐雄村長）に日本窒素火薬株式会社（現・化薬工場）が建設され、ダイナマイト製造を始めました。

旭化成は、最初に開発した合成アンモニアを土台にして、副製品を次々に生み出していく多角経営方式で工場を拡張していったのです。アンモニア工場進出からわずか10年あまり、延岡は原料薬品から、繊維、火薬等にいたる一大コンビナートに発展したのです。

昭和8年（1933年）には、日本ベンベルグ絹糸、旭絹織、延岡アンモニア絹糸の3社は合併して旭ベンベルグ絹糸株式会社と名前を改め、資本金4千6百万円の人絹会社が誕生しました。現在の旭化成株式会社の前身です。

工場の拡張・発展にともない延岡の事情も大きく変わってきました。「城下町延岡」から「工都延岡」へ急速に発展し、昭和10年代後半には人口の約4割が工場関係者で占めるようになりました。

「なつかしき 城山かねの鐘鳴りいでぬ 幼なかりし日 聞きしごとくに」郷土きょうどの歌人、若山牧水の歌です。

牧水が聞いた城山の鐘をついていたのは、城山の“鐘つきおばあさん”と市民に親しまれた故稲田コメさんです。コメさんは、昭和46年3月、71歳でこの世を去る51年間、毎日、城山（延岡じょうし城址、高さ53メートル）の鐘をつきながら、眼下に広がる延岡の街ながを眺め、街の移り変りを自分の目でしっかりととらえた、歴史の生き証人でもありました。

そのコメさんが、こんなことを語っています。

「延岡も変わった。ワシが鐘をつき始めたころ（大正9年）は、ちっぽけな街で、まだ汽車も通ちよらんかった。麦畑ばかりで夜は真っ暗やみ。星がきれいじゃった。それがあっちこちに工場、高い煙突えんとつが立ち、今じゃ昔おもかげの面影は一つもない。…工場のネオン、光のきれいなつには、見ちよってほれほれする…。」

延岡に新しいアンモニア合成工場がスタートしたのが、大正12年10月ですから、稲田コメさんのこの話は、新工場建設前後の延岡の街の移り変りを物語る貴重な証言であります。

夏目漱石そうせきの「坊っちゃん」で「猿と人が半々に住んでいるようなところ」と皮肉られた延岡が、近代的工業都市として、急速うかがに変わっていく様子が伺えます。



# 7. 延岡から朝鮮半島へ

野口氏が世界的事業家として、後の世にその名を留めるようになったのは、朝鮮半島における水資源の開発とその電力を利用しての化学工業の経営です。

すなわち、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）における赴戦江（ブジョン）、長津江（チャンジン）の水源開発、その電力を利用しての興南（フンナム）における化学工業及び鴨緑江（アムノック）水豊（スーポン）ダム建設です。

野口氏が朝鮮半島への進出を決意したのは、まだ延岡工場の拡張の最中で、大正14年（1925年）6月には、はやくも赴戦江開発のための測量隊が人類未踏の北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の険しい山々に挑みかかっていた。

野口氏がなぜ、朝鮮半島への進出を決意したのかは、次のような事情があったからです。

野口氏が国内で事業を進めるにあたって強く感じることは、もっと安くて豊富な電気が欲しいということでした。

それは、当時、硫酸肥料の消費が拡大して、いくら生産しても追いつかず、多くを外国から輸入するという状況があったからです。外国からの輸入硫酸に対抗するだけの安い国内硫酸の増産が求められていました。そのようなことから野口氏は延岡工場の拡張にあきたらず、さらに大規模な硫酸工場の建設を考えていました。そのためには、安くて豊富な電気が必要になってきます。

すでに、前々から国内各地に開発可能な電源地をさがしていました。屋久島の開発を計画し、自らも実地調査に当たったこともありました。しかし条件が整わず実現しませんでした。そこへ浮上したのが朝鮮半島での電力開発事業でした。



# 赴戦江（ブジョン）開発

## （川の流れを逆流させることができるなら）

朝鮮半島の地勢は、その脊梁（背骨）をなしている長白（チャンパイ）山脈が半島の東海岸に沿って走り、北朝鮮の日本海側は山々が重なり合い一大障壁のようになっています。それに反して西側は、一体に高原地帯を形づくり長白山を源とする河川は、おおむね緩やかな傾斜で西流して黄海へ注ぎます。

各河川は、夏季と冬季とではその流量に非常な差があり、冬季にはひどく渇水します。このことから、一般に水力電気の発源地としては不相当であるとされていました。

しかし、地図をよく調べてみると、必ずしも絶望ではありません。

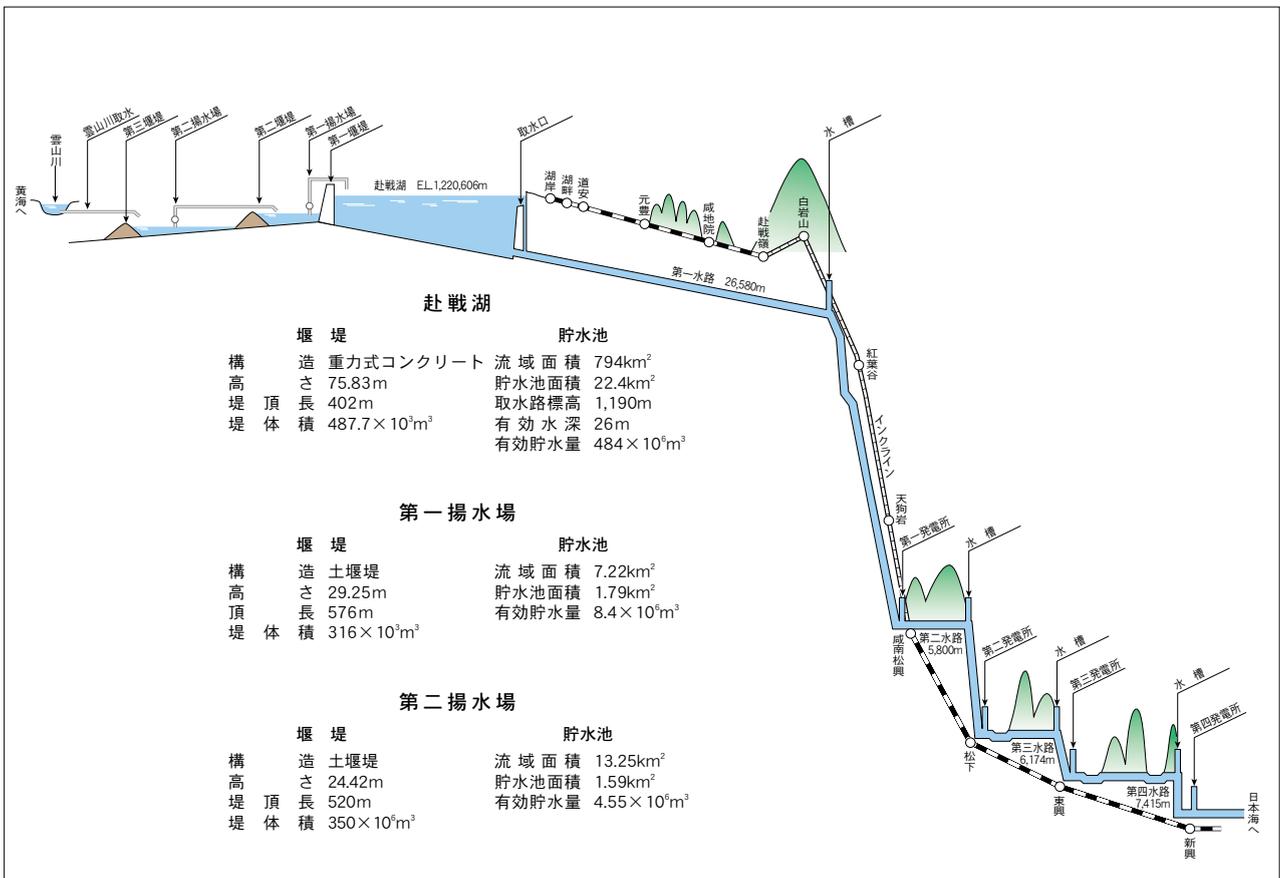
「そうだ！鴨緑江（アムノック）の3本の支流を堰き止めて、その水をトンネルを掘って日本海側に逆流させることだ。千メートルの落差を利用して、大規模な発電所が造れる」

このようにして鴨緑江の支流である赴戦江と長津江（チャンジン）に目が向けられました。

昔、韓国は清朝に対して、

「鴨緑江の水が逆流するとも貢ぎ物は絶やさぬ」

と誓ったことがあったそうです。



赴戦江水力発電所断面図

誰が鴨緑江（アムノック）の水が日本海に流れ込むことを予想し得たでありましょう。

「川の水を逆流させることができれば電気を起こすことができる。」誰もが夢にも思わなかったこの奇想天外な発想に端を発した大事業への挑戦が始まりました。

野口氏は、一旦計画を立てると、ただ机上のプランだけでは満足せず、どのように気候や立地条件の悪い所でも、自ら陣頭に立って自分が納得いくまで十二分に現地を踏査するのが常でした。

今回もまず地図の上で研究し、実現可能の見通しがたったので、実際に現地に出かけ踏査して確めました。その結果、すこぶる有望であるとの確信を得ました。

ここに、私たちは、次から次へと事業を計画し、仕事を追っかけていく野口氏のたくましい行動力と理論・実践・証明という科学的な姿勢を見ることができます。

大正15年（1926年）、まず、事業を進めるのに必要な会社を資本金2千万円で設立し、朝鮮水電株式会社と名付けました。

赴戦江（ブジョン）開発の内容は、その全領域を堰き止め、周囲78キロメートルに及ぶ大貯水池を築造すること、堰堤を建設すること、河川の水を東へ逆流させ日本海側へ流すために分水山脈を貫通する延長28キロの大隧道を掘鑿すること、水圧鉄管を敷設すること、1千メートルに達する高落差で8百数十個の水を使用する発電所を建設すること、鉄道インクラインを施工することからなり、総工費5千5百万円、当時としては東洋一の大工事でした。

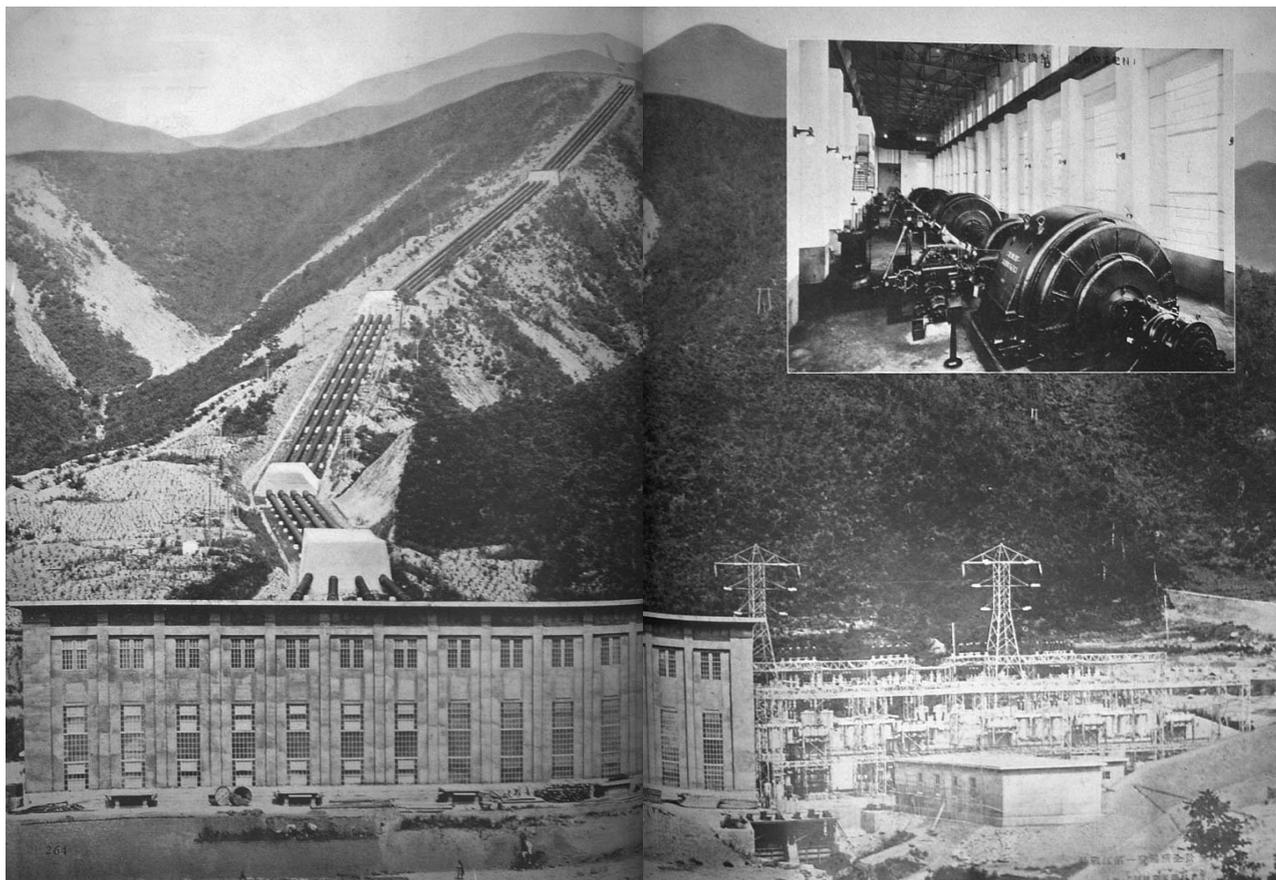
こうして、奇想天外な着想から出発した工事は、昭和5年（1930年）に完成し、20万キロの電力を得ることに成功しました。



赴戦江堰堤

ところで、<sup>ぶんすい</sup>分水山脈の<sup>かんつう</sup>貫通工事に関わることでこんな話が残っています。<sup>ずいどう</sup>大隧道の<sup>くっさく</sup>掘鑿作業を請け負ったある土木会社が、<sup>けいやく</sup>契約金が安かったとみえ、実際の工事費はそれをかなりオーバーしてしまいました。このように下請けの会社が無理をして、損をした場合、野口氏は、このことは自分の責任だとして、お金を追加して支払ったということであります。

このような世界的大事業を成功に導いたものがあつたとするならば、その陰に野口氏の人間性と、事業を支えた人々の温かい心の支えあいがあつたことを見逃してはならないと思ひます。



赴戦江発電所

## 興南（フナム）工場建設 （世界第2の化学工業都市建設をめざして）

赴戦江（ブジョン）の流れを逆流させ、念願の20万キロワットの電力を手に入れることには成功しましたが、ここで一つ問題にしなければならないことがありました。それは、せっかく苦勞して手に入れたこの電力を何に使うかということであります。

なにしろ、山々が折り重なり、<sup>へんび</sup>辺鄙な北朝鮮の山奥ですから、ここで、何十万キロワットという大規模な発電所を設けたところで、その電気を消化する生産工場の無い限り、いたずらに、資本と勞力<sup>ろうひ</sup>を浪費するだけで、<sup>ぞく</sup>俗にいう宝の持ちぐされになってしまいます。

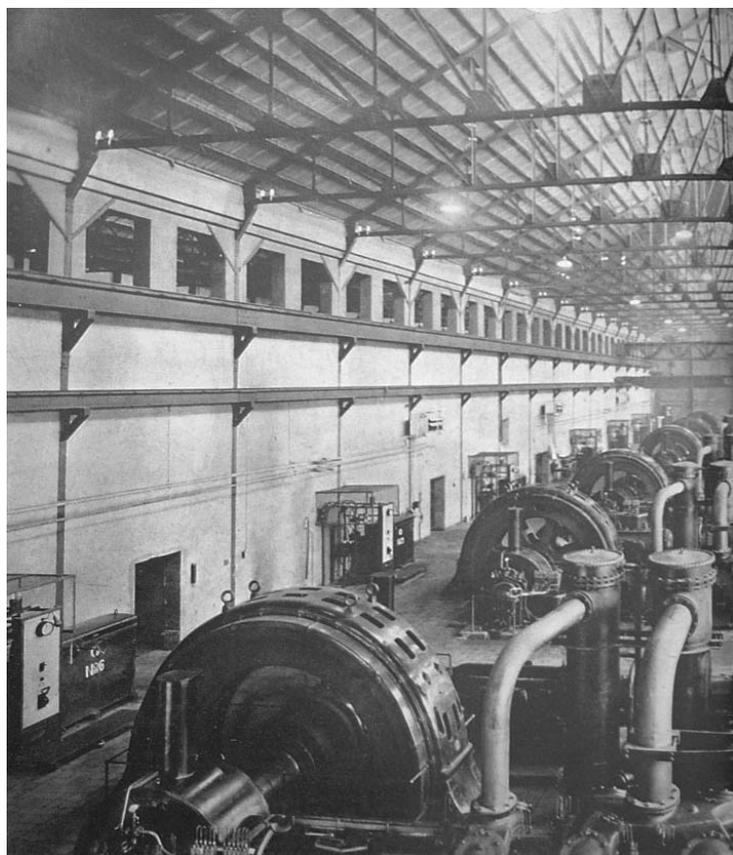
電力を供給する発電所から、さほど遠く離れていない所で、この電力を使って工業が起こせる工業用地として開発可能な用地がなければなりません。野口氏は赴戦江（ブジョン）の開発計画を進めるに先立ってこのことを十分考え構想を練った上で事業に着手しています。実は、この地が興南（フンナム）だったのです。

野口氏は、事業を遂行する上に、全体を洞察し、先を見通すのに鋭い感覚をもっていました。開発前の興南は20～30戸の家屋が散在する淋しい漁村にすぎませんでした。それがわずか10数年足らずで世界に誇る一大化学工業都市に飛躍したのです。

野口氏は、昭和2年（1927年）資本金1千万円で、興南に朝鮮肥料株式会社を設立し、肥料、その他の化学工業を興すために興南工場の建設を始めました。

工場は着々と整備が進み、世界一の肥料工場をはじめとし、工業薬品、油脂、マグネシウム、亜鉛、カーバイド、合成宝石、カーボン、火薬、航空燃料、人造ゴム等の諸工場が建設され、鉄道、港湾その他の付属設備を完備し、工場と住宅の敷地合わせて5百数十万坪（千7百ヘクタール）、工場従業員4万7千人、総人口18万人に達する都市に成長しました。

街には煉瓦造りの工場をはじめ倉庫や事務所はもちろん、多数の従業員を収容するための住宅、娯楽設備、運動施設、病院、学校、郵便局、役場、集会所、警察署等の諸施設が備わっていました。しかも、これらの施設は、当時としては驚くべきことに、全部が煉瓦造りであり、水洗便所をもち、冬は蒸気暖房の施設を完備していました。



興南工場

世界において、これに匹敵する工場があるかどうか、種々の資料を集めて調べてみました。それによるとその規模において、同時代のドイツE G会社オッパウ工場につぐ世界第2の化学工場であり、興南工場をしのぐものは、イギリス、フランス、アメリカにもないことがわかりました。

日本で仮に興南工場と比較するにたる工場となれば、大牟田工場群か新居浜工場群ということになります。しかし、両方とも日本有数の財閥が、古くから存在する確固たる基盤の上に、何十年かの歳月をかけて成立させたものであります。

一個人としての野口氏が、財閥の背景もなく、政府の援助も受けずにほとんど独力で、しかも短期間の内に、世界に驚異ともいふべき大事業を成し遂げたのとはわけがちがいます。

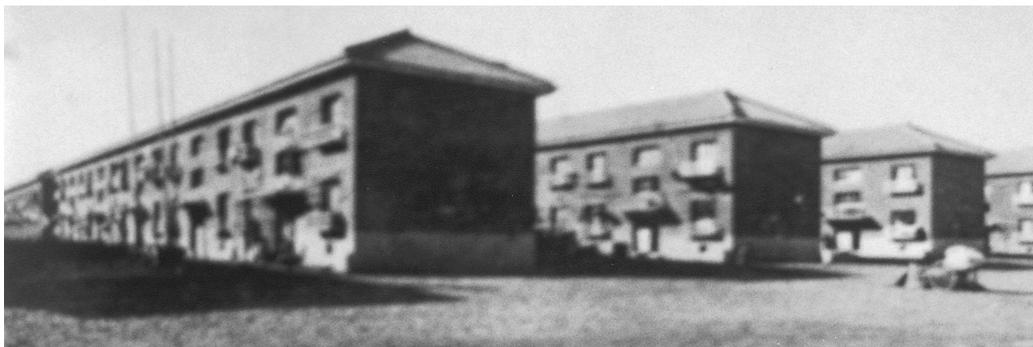
野口氏の事業は、常に発電所と工場を車の両輪のように展開していきました。発電所ができると、その電力を利用する工場を建てる。工場が発展して再び電力が足りなくなると、新たに電源を探す。氏の目は常に未開拓の分野、土地に注がれていました。その過程で障害や難関が起きると、ますます、闘争心をかき立て、ついに海外にまで拡張して行ってしまったのです。

これまでに赴戦江（ブジョン）開発、興南（フナム）工場建設のようすを見てきましたが、これらの事業を成功に導いたものがあるとすれば、それは何であったのでしょうか。

まず、事業に注ぐ野口氏の「すさまじい気迫と情熱」があげられましょう。

つぎには、未開拓の地に積極果敢に挑んでいく野口氏の「フロンティアスピリット（開拓者魂）」をあげることができると思います。それも、純粹さが感じられます。

社員と家族のために造られた、興南工場のすばらしい社宅、病院、高等女学校



社宅



病院



高等女学校

野口氏と親交のあったある人物は

「野口さんの行動には、戦時中のような植民地主義のにおいがなく、すがすがしさがある。それは純粋な開拓精神に突き動かされていたからである」

と語っています。

興南時代の野口氏は「安くて良い肥料が供給できれば農作物もうんと豊富になり、朝鮮の農民の生活を安定させ、ひいてはそれが商工業振興にもつながる」と口癖のように独り言を言っていたそうです。

晩年、野口氏は戸籍を日本から興南に移し、ここを終生の地と決めました。

興南時代の野口氏について、その人柄を知る上で参考になる次のようなエピソードがあります。これは当時、興南工場に勤めていたある社員が書き記したものです。

「それはたしか昭和14年（1939年）初夏の頃だったと思います。当時、私は朝鮮の工場に勤務してしまして、年に2～3回ぐらい東京や大阪に参り社用をすませ、朝鮮に帰るのであいさつに重役室をお伺いした際、庶務部長が私を呼んで『君、実は今日、野口さんが朝鮮に行かれるのだが、あいにく都合が悪くて誰も鞆持ちを務めることができぬので、一つご苦勞だがやってくれぬか。』との突然の話でありました。私はまだ野口さんのような偉い方の鞆持ちを務めた経験ありませんし、内心これはえらい事になったものだ、と困惑の色をかくし得なかったのですが、そんなことに頓着なく『島村君が朝鮮に帰るのでちょうどよかったと思います。』と野口さんに申し上げ、いやおうなくそのように決まったのであります。

そして、その日の10時何分かの下り急行に、お供をして乗り込んだのであります。野口さんは1等展望車、私はその近くの2等車に座席をとりました。もちろん、野口さんのお話相手ができるわけでもなし、お席のすぐ近くに窮屈な思いをして待っているよりも、クラスが違っているのがむしろ幸いに思われました。そして、汽車に乗り込んだ以上、たいして用事もなし、私は連日の仕事や都会の強い刺激のためだいぶ疲労していたので、何時の間にかぐっすり寝込んでしまったのであります。だいぶ長い間ただただろうと思われる頃、目を覚ましてみますと、私の眠っている胸の上に、新聞や雑誌が積まれていたので、さては野口さんがご一読され



たものを、自ら持って来て下さったものと面食らっています時、野口さんが親しくお出でになって、今着いた駅で買い求められたアイスクリームを差し出されながら『疲れたとみえて、よく眠っていたね。』と微笑まれて自席に引き返されました。私は野口さんのお世話を申し上げなければならぬ立場にありながら、却ってこういう親切をしていただいてまったく恐縮いたしました。そして、今まで見たり聞いたりしていたあの怖い野口さんの内に、想像だにできなかった温かみのある美しいものを見だして頭が下がる思いがいたしました。」

ワンマン社長と言われ、短気でよく部下を叱った話もありますが、庶民的で人情に厚く、技術者を大切に育てられた野口氏の一面が伺える話です。

## 長津江（チャンジン）開発 （土木界での世界記録）

長津江は、赴戦江（ブジョン）の南数十キロの地点をこれと並行して北流する鴨緑江（アムノック）の支流です。赴戦嶺から50キロほど離れた黄草嶺に源を発して海拔1,100メートルの高原地帯を北にゆるやかに流れ、およそ40キロほどいって峡谷に入ります。この地点にダムを築いて流れを堰き止め、これを隧道に導いて逆流させ、日本海側の黒林江に落として、約33万キロワットの発電を行うというのが開発計画であります。

野口氏が長津江に着目したのは、先に開発した赴戦江で異常な渇水が2年間続き、予期した電力が得られず電力不足に悩んだこと、金解禁の影響を受け、肥料の価格が下落し大きな痛手を負ったこと、今後、興南工場の電気化学工業の拡大を期するためには、さらに大量の電力を必要としたこと等があげられます。

野口氏は、日頃から「景気が悪い時に仕事をしなければならぬ。景気がいい時には誰もが金



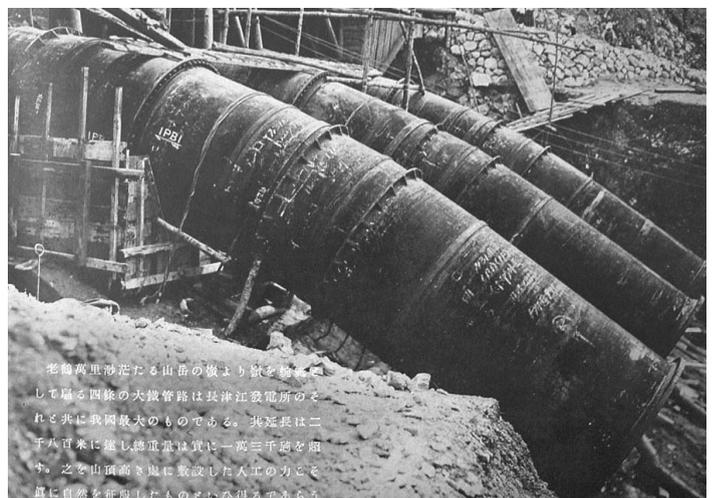
長津江堰堤

を使うし物も高いが、不景気の時<sup>うけおい</sup>は請負も安い。」と言っていたことから、赴戦江（ブジョン）ならびに興南（フンナム）工場完成後の深刻な不景気<sup>えんてい</sup>がかえって野口氏の事業欲をかきたてたとも言えましょう。

昭和8年（1933年）6月に工事が開始されました。長津江（チャンジン）の工事は赴戦江の工事をしのぐ大土木工事でした。頂長616メートル、高さ38メートル、セメント300万袋を要しました。堰堤は丹那トンネルの3倍以上にあたる延長24キロ、直径4.5メートルの水圧大隧道<sup>ずいどう</sup>が地下40～70メートルを通るとい難工事でした。それにもかかわらず、わずか2年間の短期間で完成しました。これは世界の土木界に新記録として残りました。

さらに、もう一つの特徴は、工事のために使用した資材、機械類（水圧鉄管・水車・発電機等）のすべてを国産に求めたことでもあります。まさに日本工業の名誉にかけての感がありました。

ところで、これらの資材や機械類をメーカーが事業主に納めるときの見積もりは予想以上に値引きされていました。野口氏は「ムチャに値を引かしてはいけない。もっと値を上げてやりなさい。」ということでした。メーカー側は「値を下げれば買おうというのが普通なのに、反対に値を上げて買う人は初めてだ。」と感激したそうでもあります。



形輪萬里渺茫たる山岳の嶺より鉄管を運搬して居る四條の大鐵管路は長津江発電所のそれと共に我國最大のものである。其延長は二千九百米に達し總重量は實に一萬三千噸を越す。之を山頂高き處に敷設した人工の力で、眞に自然を征服したものとせしむ得るであらう

水圧鉄管路

# 鴨緑江(アムノック)開発・水豊(スーポン)ダム (世界の奇跡)

赴戦江（ブジョン）等の河川の開発に成功し、人口18万人に及ぶ興南（フンナム）の化学工業都市を建設した野口氏の実業家としての生涯は、今やようやくにして、大成期に入ったと云えます。

ここに、野口氏の大手腕に依存すべき一つの大事業が残されました。それは、朝鮮と満州国（中華人民共和国）の国境を貫通する鴨緑江の開発であります。

鴨緑江は、その流域が6万平方キロもあって、九州の面積よりずっと広く、水の量も年平均毎秒800立方メートル以上あって、日本最大の河川の4、5倍は優にある河です。

国際河川である鴨緑江の開発には、相当の面倒があることも予想されましたが、とにかく実地調査をすることにしました。ダムをつくるなら川筋のどこにでもつくれるし、水量は豊富なので、少なくとも200万キロワットぐらいの電力が期待でき、非常に有望でありました。

開発計画は、海拔500メートルから海面に近いところまで、約500キロメートルの間に7つのダムをつくり鴨緑江を貯水池の連続にすることによって総計200万キロワットの発電施設を作るという膨大な計画でした。

この7つのダムの内どれを最初にやるかということになりましたが水豊ダムから着手することになりました。

水豊ダムは、河口より約120キロ、新義州（シニジュ）・丹東（タントン）より約80キロの上流にあり朝鮮側（朝鮮民主主義人民共和国）と満州側（中華人民共和国）の両岸にまたがる幅900メートル、高さ170メートル、貯水池の面積は345平方キロで琵琶湖の半分、霞ヶ浦の倍に当たり、人造湖としては、北米ボルダーダムに次ぐ世界第2の規模を誇るダムになりました。

発電所内に設置された10万キロワットの発電機は世界最大の発電機でした。

建設中のダムを見学したある人物は「昭和16年（1941年）のはじめであった。建設中の水豊ダムを見学した。当時はすでに第2期工事を終え、間もなく発電するまでになっていたが、その規模、設備ともに日本人離れがしており、いずれの点から見ても世界的大事業だと思って感嘆した。今更ながら、日本人として、世界に誇る事業の一つを遂行した野口さんの着眼の広さ、肚の太さ、実行力の偉大さに心から敬服した。」と語っています。

このようにして、水豊ダムは完成し、豊かで安い電気を手に入れることに成功しましたが、鴨緑江の水は分水嶺を一挙に落下して電気を起こすだけでなく、発電所を出た水は、下流において利用され1万数千ヘクタールの水田は開墾され、さらに下流に至っては興南の工場用水となりました、それだけではなく貯水池には淡水魚が養殖され、貯水池周辺の高原地帯には牛や豚の牧畜が行われるようになりました。

また、従来、交通不便のために放置されていた木材が貯水池工事用インクライン鉄道を利用して開発され製材されていきました。

ところで、アメリカでTVA（テネシー河流域開発）が行われたのは1933年、当時のルーズベルト大統領のニューディール政策によるものでありますが、日本においてはすでにTVAに先立つ数年前の1924年に朝鮮において日本式TVAがスタートを切ったこととなります。

興南（フナム）工場を中心とする一大化学工業地帯に建設・水豊（スーポン）ダム及びその流域の総合開発がそれです。

朝鮮動乱終結後、米国の報道機関は「この事業が野口<sup>したかう</sup>遵という一人の実業家と、そのグループの手によって成し<sup>と</sup>遂げられたことは奇跡<sup>きせき</sup>に近い。」と世界に紹介しました。



水豊ダム

## 8. 事業への夢広がる (満州・台湾・南方へ)

野口氏の事業への情熱は、晩年になっても少しも衰えず、満州（中華人民共和国）、台湾、海南島と次々に会社を興していきました。

さらに、黄河、揚子江の水力開発、フィリピン、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、マレー半島とアジア全域にわたって開発の夢を広げていきました。「事業は僕の生命である。死ぬまで事業をやる」とはその頃野口氏がよく語られた言葉です。

新たな夢を描き、情熱を燃やして新しい大きな事業に向かって敢然と取り組もうとしていた矢先、昭和15年（1940年）2月、野口氏はソウルにおいて突然病に倒れました。

## 9. 全財産を寄付 (社会の公共事業のために)

次に紹介する文章は、生前野口氏と親交のあったある実業家が氏を見舞った時の手記です。

「野口氏の病が重くなったある日、氏からは是非会いたいという呼び出しを受けて、私はソウルの病室にお伺いしたのです。私は、仕事の関係でこれまで野口さんには、時々お目にかかる機会もあり、常々心から敬意を払っていた次第です。私が野口さんに最後にお目にかかり、私にとって生涯の中でも、めったにない深い感銘を覚えたその会見の様様を書き記します。

野口さんは私の訪問を大変喜ばれて、不自由なお口で次のような事を話されたのです。

『僕は今度君の真似をして研究所をつくることにした。僕は今日までワンマン事業家として



会社を経営し、思い切った仕事をしてきた。万一仕損<sup>しそん</sup>じても、株主<sup>めいわく</sup>に迷惑をかけないように、従業員を路頭に迷わせないように金を貯<sup>たくわ</sup>えてきた。しかし、幸いにして、僕<sup>ぼく</sup>の関係する事業は、朝鮮のものも、内地のものも、いずれも好成績を収めているし、近くは海南島で数億トンにのぼる鉱山を発見した。それでも責任を負うべき必要がなくなった。僕は子供に財産を残す考えはない。したがってもう財産の必要がなくなったので、この不要になった約3千万円（現在の価値で約3百億円）の資産を何に使うか考えてみた。古い考えかもしれないが、報徳とか報恩ということが自分の最後の目的である。自分は結局、化学工業で今日を成したのだから、化学方面に財産を寄<sup>きふ</sup>付したい。それと、朝鮮で成功したから朝鮮<sup>しょうがく</sup>の奨学資金のようなものに役立てたい。』というお話でした。

私は非常な感激をもって、野口さんに、国民に代わって心からお志に感謝すると申し述べ、長時間のお話が、お体にさわってはと心配して、早々においとましようとすると、野口さんは私を引き留められ

『僕は、一日も早く元気になって海南島にも行きたい。』

などとお話があり、最後に

『僕は是非やりたい仕事の一つある。それは、揚子江（長江）を三峡の所で堰<sup>せ</sup>き止めて一大水力発電所にして、その電力で大肥料工場を作って、中国の農民に安い肥料を大量に供給したい。肥料を使わない今日でも、あれだけの生産があるのだから、これに十分な肥料<sup>ほどこ</sup>を施せばおそらく世界の食料問題は一挙にして解決し得る。食べることの心配がなくなればもう戦争なんかしないですむではないか。』

と言われました。事業家としての自分の力で世界の平和に貢<sup>こうけん</sup>献したいという悲願<sup>うかが</sup>を伺って私は野口さんへの尊敬と敬服の念を一層強めた。」と書かれています。

その後、野口氏の私財3千万円のうち、2千5百万円（現在約250億円）で化学工業を調査



野口研究所（東京都板橋区）

研究するための「財団法人野口研究所」が設立され、アセチレン、イオン交換樹脂<sup>じゅし</sup>、木材化学、森林資源開発等の調査研究に大きく貢献<sup>こうけん</sup>しています。

残りの5百万円（現在約50億円）を朝鮮奨学会<sup>しょうがく きふ</sup>に寄付されました。朝鮮動乱後、朝鮮半島は不幸にして朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国の二つの国に分かれましたが、奨学会は今も南北同数の理事が机を並べて仕事をしている団体で、これまでに4万人近い奨学生を送り出しています。

日本にも古今、富豪<sup>ふごう</sup>と呼ばれる人は数多くいましたが、全財産を投げ出して社会に貢献した例はあまり聞きません。国家や民族、思想や信条を越え、ただひたすらに事業を追求してきた野口氏の高潔<sup>きょうれつ</sup>で強烈な意志を感じます。

## 10. 巨星ついに墜つ

昭和19年（1944年）1月15日、「延岡新興の母」であり「世界の大事業家」であった野口 遵<sup>したがう</sup>氏は、人々に惜しまれながら波乱多き72歳の生涯<sup>しょうがい</sup>を閉じました。

私たちはこれまで、「延岡新興の母」「世界の大事業家」と言われた野口氏の事業の足跡をたどり、科学者であり事業家であった氏の事業に対する姿勢や人柄、生き方等についてみてきました。

生前、野口氏と親交のあった多くの人々が、氏についていろんなことを語っています。

- ・「事業即生命」を信条に明けても暮れても仕事一筋に生きた人
- ・行動力でたくましい生き方をした人
- ・金持ちの財閥や、権力を持った政治家にたよらず、自分で考え、自分で決断し、自分の信じる道を忠実に貫き通した人
- ・科学を基礎とし世界の驚異というべき事業を成し遂げた人
- ・未開の地に好んで飛込み理想実現のために果敢に挑戦したパイオニア
- ・ぶっきらぼうで部下をよく叱ったが、庶民的で人情味に厚く、胸の底に人間的な熱い血潮が流れていた人

さて、皆さんはどのような感想や印象をもったでしょうか。また、数々の世界的大事業を達成することができたのは一体何によるものであったのか読み取っていただけたでしょうか。

ここで、皆さんにぜひ考えてほしいことがあります。それは、野口氏自身はどのような生きがいや理想を求めて仕事を進めたのかということであり、氏の仕事をつき動かしたものは一体なんだったのでしょうか。

野口氏の一生は、明けても暮れても仕事一筋であったと云われています。しかも気候や立地条件の悪い未開の地でも好んで飛込み果敢に事業に挑戦する生涯でした。「事業は僕の生命である。」ということをよく語られたということです。

氏の生涯は事業そのものであり、ただ事業を進めることに純粋な喜びや生きがいを感じておられたのではないかと推測しますがどうでしょう。まさに氏の言う「事業即生命」であります。

次に考えられることは、先にみたように、興南（フナム）工場の建設や揚子江（長江）開発にあたって、「朝鮮や中国の農民に安い肥料をたくさん供給したい。そうなれば戦争なんかしないですむ。」と口癖のように言っておられたことを紹介しましたが、このことを改めてかみしめてみたいと思います。

「アジアの人々を豊かに、そして平和に。」それが氏の事業遂行の根底にあった生きがいや理想であったように思われるのです。

野口氏は亡くなる直前に全財産を投げ出され、これを化学工業の研究と、朝鮮奨学生のための奨学金に当てられました。国家や民族、思想や信条を越えて人々のために貢献されようとした氏の高潔な志と崇高な生き方に強い感動を覚えます。

野口遵氏の生き方から皆さんがいろんなことを学ばれ、氏の精神が皆さんの心のなかに生きつづけ、皆さんがたくましく成長することを願ってやみません。

# 野口 遵 年譜

西 暦	で き ご と
	〈 明 治 時 代 〉
1868	明治 <sup>いしん</sup> 維新
1871	明治新政府 <sup>はいはん ちけん</sup> が廃藩置県を行う
1872	延岡郵便局開設
1873	野口 <sup>ゆきのぶ</sup> 之布の長男として金沢に生まれる
	岩倉 <sup>ともみ</sup> 具視大使一行、欧米 <sup>おうべい</sup> 視察から帰国
1877	西南戦争が起こる
1878	城山 <sup>かね</sup> の鐘時報を告げ始める
	延岡警察署が設置される
1889	大日本 <sup>ていこく</sup> 帝国憲法が発布される
1894	日清戦争が始まる
1896	帝大（現・東京大学）電気工学科卒業
	郡山電灯会社に就職
1901	シーメンス・シュケルト日本出張所に入社
1904	日露 <sup>にちろ</sup> 戦争が始まる
1906	曾木 <sup>そき</sup> 電気株式会社（鹿児島県大口市）を創設
1908	渡独 <sup>とどく</sup> しフランク、カロー両氏の石灰窒素製造特許権を買収
	日本窒素肥料株式会社水俣工場 <sup>みなまた</sup> でカーバイド並びに石灰窒素の製造を始める
1909	石灰窒素 <sup>みなまた</sup> 水俣工場が完成
	〈 大 正 時 代 〉
1914	鏡工場（熊本 <sup>やつしろ</sup> 県八代市）が完成 硫安 <sup>りゅうあん</sup> の製造を始める
	第一次世界大戦が始まる
1920	日本が国際連盟に加盟する
	五ヶ瀬川電力株式会社を設立
1921	渡欧 <sup>とおう</sup> しカザレー式アンモニア合成法特許権を買収
1922	旭絹織 <sup>けんしよく</sup> 株式会社を設立
1923	日本窒素肥料株式会社延岡工場（現在の旭化成）が操業開始
	国鉄日豊線全線開通 延岡駅が落成
	関東大震災 <sup>しんさい</sup> が起こる
1925	五ヶ瀬水力発電所を建設

西 暦	で き ご と
1926	赴戦江（ブジョン）開発のため朝鮮水電株式会社を設立
1925	治安維持法、普通選挙法が公布される
<p>〈 昭 和 時 代 〉</p>	
1927	<small>みなまた</small> 水俣新工場を建設、 <small>りゅうあん</small> 合成硫安の製造を始める <small>ちっそ</small> 興南（フナム）に朝鮮窒素肥料株式会社を設立
1928	ドイツのベンベルグ社から <small>じんけん</small> 人絹製造特許権を買収
1929	日本ベンベルグ絹糸株式会社を設立（旭化成ベンベルグ工場）
	興南工場が完成
1930	延岡町・岡富村・恒富村が <small>がっぺい</small> 合併し、延岡町となる
	日本窒素火薬株式会社を設立し東海村に火薬工場が完成
1931	満州事変が起こる
	赴戦江系水力発電所の工事が完成
1933	延岡市誕生（人口42,401人）
	旭ベンベルグ絹糸株式会社を設立
	（延岡アンモニア絹糸、日本ベンベルグ絹糸、旭絹織が合併）
	延岡レーヨン工場が完成（旭化成レーヨン工場）
	長津江（チャンジン）開発のため長津江水電株式会社を設立
1936	東海村と伊形村とが延岡市に合併する
1937	水豊（スーポン）ダム建設のため鴨緑江水電株式会社を設立
	日中戦争が始まる
1940	海南島を視察 2月9日ソウルで病に倒れる
1941	全財産（現在約300億円）を <small>きふ</small> 寄付、野口研究所、朝鮮 <small>しょうがく</small> 奨学会が設立される
	朝鮮を去り伊豆韮山の別荘で療養する
	太平洋戦争が始まる（～1945）
1943	水豊ダムが完成
1944	1月15日 <small>せいぎよ きょうねん</small> 逝去 享年72歳
1945	延岡大空 <small>くうしゅう</small> 襲
	ポツダム宣言を受諾する <small>じゅだく</small>
1948	社名変更 旭化成工業株式会社となる

## 参 考 文 献 一 覧

- 野口 遵翁追懷録 高梨光司編纂、1952年
- 野口 遵 吉岡喜一著、1962年
- 野口 遵翁と延岡 市山幸作著（夕刊デイリー新聞社掲載）
- 創魂野口 遵 市山幸作著、1993年
- 延岡の父内藤政挙公 市山幸作著
- 延岡の今と昔 小嶋政一郎著
- 夕刊デイリー新聞
- 宮崎日日新聞
- 毎日新聞
- 読売新聞
- 日本経済新聞
- 薬品部30年史 旭化成工業株式会社編、1962年
- 薬品工場40年史 旭化成工業株式会社編、1964年
- 薬品工場50年史 旭化成工業株式会社編、1975年
- 旭化成80年史 旭化成株式会社編、2002年
- 日本窒素肥料事業大観 日本窒素肥料株式会社編、1937年
- 「野口 遵」翁と西松建設 西松建設株式会社編、1978年
- 延岡動力部史 旭化成工業株式会社編、1990年
- 朝鮮電気事業史 朝鮮電気事業史編集委員会編、1981年
- 延岡百景 今と昔 延岡百景今と昔編集委員会編、1976年

## 『野口遵顕彰会』の活動

世界を見据えて大事業を成し遂げられた偉大な先駆者、野口 遵 翁の遺徳と業績を偲び、その功績を広く後生に伝えるとともに、新たな時代感覚で顕彰し21世紀の新しい産業社会を興していく担い手として青少年に科学技術への夢と希望を育む事業を行っていきたく願うものであります。

### 顕彰会の事業

#### (1) 青少年の科学技術研修派遣

延岡市、高千穂町、日之影町の科学技術に関心をもつ中学生を、夏休みを利用して、野口研究所、科学技術研究所等へ研修派遣する。

#### (2) 歴史教材（副読本）の発行

野口遵翁の業績と延岡の工業都市への発展の歴史を中学校向けの小冊子にまとめ、教育委員会の協力を得て、学校の教材として活用する。

#### (3) 野口賞の創設

宮崎県内において、工業化技術開発に顕著な業績をあげた企業（個人）を表彰し、副賞を授与する。

#### (4) 国際交流事業（中長期の事業構想として）

野口遵翁の事業と関係の深い、北朝鮮（興南工場）中国（吉林）ならびにイタリア（カザレー博士）等との国際交流事業を行う。

本書を出版する際に関しては、延岡市教育委員会、ならびに㈱旭化成アピリティ延岡営業所、また、各種の資料提供にご協力をいただきました旭化成㈱各工場の方々には大変お世話になりました。

深く感謝を申し上げます。

## のべおか新興の母

野口 遵

2003年4月1日 発行

---

発行 野口 遵 顕彰会 会長 清本 英男  
〒882-0824 宮崎県延岡市中央通3-5-1  
(延岡商工会議所内)  
電話 0982-33-6666

編集 野口 遵 顕彰会 歴史教材編集委員会  
中川 文夫 (野口 遵 顕彰会 副会長)  
田近 克美 (野口 遵 顕彰会 幹事長)  
大崎 清 (野口 遵 顕彰会 理事)

執筆者 内野 康一 (元岡富中学校 校長)  
猪野 隆徳 (元土々呂中学校 校長)  
山崎 龍一 (現旭小学校 教頭)

印刷 本 (株)旭化成アビリティ延岡営業所  
延岡市旭町3丁目1-1  
電話 0982-22-2770

---

